

持続可能な佐田のまちづくりフォーラム

兼第1回さだラボフォーラム

# 記 録 集

と き：2020年（令和2年）2月23日（日） 13時から16時20分

と ころ：出雲市佐田町反辺 スサノオホール 大ホール

共 催：特定非営利活動法人 スサノオの風

島根大学教育学部地理学研究室佐田サテライトラボラトリー

協 力：佐田自治協会・佐田自治協会「小さな拠点づくり部会」

## 開会のあいさつ

三島（貴） 皆さんこんにちは。本日はお忙しい中、ご来場いただきまして誠にありがとうございます。ただいまから、「持続可能な佐田のまちづくりフォーラム兼第1回さだラボフォーラム」を開催したいと思います。私、本日の司会を務めさせていただきます、NPO法人スサノオの風の三島貴子と申します。よろしくお願いいたします。

それでは、主催者を代表いたしまして、NPO法人スサノオの風理事長、石橋正伸からご挨拶をいたします。

石橋 皆さんこんにちは。少し今緊張しております、話があちらこちらに飛ぶかもしれませんが、よろしくお願いいたします。本日は大変お忙しい中、佐田町内はもとより県内各地からご参加いただきまして、ありがとうございます。まずもってお礼を申し上げたいと思います。



また、本日のフォーラムの、出雲市の総合政策部次長兼自治振興課長の三島慎也次長様、そしてこのフォーラムの助成をいただきました、東京にあります一般財団法人Y S市庭コミュニティ財団の東島理事長さんにもおいでいただいております。本当に今日はありがとうございます。

また、このフォーラムは島根大学の佐田サテライトラボラトリーとの共催という形で行わせていただきたいというふうに思っています。

佐田町はご承知のように、人口がどんどん減っております。20年後には1,800人くらい、そして30年後にはせいぜい1400人になっているというように言われています。人口が減っていてもこの地が無くなる訳でもありませんし、この波をなかなか止めることはできないなというふうに思っております。

そういう中で私たちが、今この地域を未来にどういうふうに伝えていくか。そのためには今暮らしている私たちが、この生活の質を上げていくということが必要なというふうに思っております。そのためには若い人から、子どもたちからお年寄りまで、そして男性も女性も一緒になって、話し合っていくということ。それが第一歩ではないかというふうに思っています。

このフォーラムのテーマは、「タニンゴト」から「ジブンゴト」です。自分のこととして、この佐田の地域を考えてほしいなというふうに思っています。今回のフォーラムが、今後の佐田のまちづくりの一步になればというふうに思っているところでございます。3時間半という今日のフォーラムは長丁場です。最後までおつき合いただきますようお願い申し上げます、私の簡単なご挨拶とさせていただきます。本日はありがとうございます。

三島（貴） 続きまして、本日ご多忙の中フォーラムにお越しいただきましたお二方からご挨拶をいただきたいと思えます。初めに、出雲市役所政策企画部次長兼自治振興課長 三島慎也様をお願いいたします。

三島（慎） 皆さんこんにちは。紹介いただきました、市役所の三島でございます。まずはこうして本日、このフォーラムが開催される運びとなりました、このことについて、ここまで準備・運営と企画に携わられました皆様に対し、心から敬意を表する次第でございます。

出雲市には、ご承知とは思いますが、43のコミュニティセンターがございます、それぞれの地区があるわけがございます。当然それぞれ地区ごとに特性もあれば、あるいはいろいろな課題もお持ちになっていらっしゃるという状況がございます。そのような中で、



とりわけこの佐田地域もそうなのですが、過疎地域あるいは辺地地域と呼ばれる、いわゆる地理的に不利な条件であるが故に、人口の流出や、人口減少あるいは高齢化といった課題、これらは地域のコミュニティの存続・維持、それに直結するような課題でございますけれども、そういった大きな悩みをお抱えになっていらっしゃるということ

でございます。

そのような中で、こちら佐田地域におかれましても、自治協会あるいは振興協議会の皆様それぞれ危機感をお持ちになって、この佐田についてどうしていくかということをお考えいただいております、併せてこのスサノオの風の皆さん、あるいは島根大学のさだラボの関係の皆さんも連携して、その課題に取り組んでいらっしゃるという状況でございます。

話はちょっと変わりますが、昨日、市長がある会議の挨拶の中で触れたことがあるので、少しそれを調べてみたのですが、ことし丁度、国勢調査の年に当たるわけです。それで、第1回が大正9年ということで、1920年に実施されておまして、ちょうど100年となるということのようです。その中で、第1回の調査の数字が、日本全体の人口が5600万人。島根県の人口が71万4000人。前回、平成27年度に実施された調査では、全国は1億2700万人。島根県が69万4000人。全国が2倍以上になっている中で、島根県については減っているということなのです。どうやらこれは全国で唯一、この間で減った都道府県だということが分かりました。

何でこういうことを言うかということ、出雲市においてもある意味同じような構造というのがございまして。出雲市全体の人口でいきますと、大体15万7000人前後で、佐田町が今3,100人程度ですか。合併前、24年ぐらい前の数字を見ますと、出雲市においては1,000人弱増えている中で、佐田町においては700人ぐらい減っている状況です。

これら、同じこの中で、要は県外、市外への流出とはまた別の意味で、人口の動きによって佐田町には、佐田町に限らず中山間地と呼ばれる地区から、市街地といいますか、そちらのほうに移動している。こういった傾向もあるということ、1つの視点として、中山間地

の振興については考えていかなければならないということも思ったところだったのです。そういう意味でちょっと紹介させていただいたのですけれども。

そういう思いの中で、市といたしましても、平成29年にいわゆる中山間地の振興のために、「うみ・やま応援センター」を設けまして、専任のスタッフをそれぞれ配置して、皆さんと膝を突き詰めてお話をするような体制をとって、振興に努めてきておるところでございますが、なかなかこれも成果が上がっていないというのも、現実のところであるとは思っています。

やはり、地元にお住まいになっている皆様は、どういう町をつくりたいか、どういう町にしていきたいかという、そういった意識、意欲を持っていただくことが何より必要でございます。そのことによって、20年先30年先、50年先、皆さんの子供さん、孫さん、あるいはその先の世代の皆さんに、佐田が住みよい、住みたいと思う佐田地域を創っていくべきということになるわけでございます。

そうは申し上げましても、皆さんいろいろとお仕事もなさっていらっしゃる、あるいはその他の地域活動もなさっておいでの中で、やはり新たにいろいろとまた考えなければいけないということで、負担にお感じになられる方もいらっしゃると思いますが、やはり先ほど申し上げましたようなこれからの未来、佐田町の未来というものを、そこに住む子供たち、それからその次の世代、彼らのために、彼女らのために、やはりきちんとしたビジョンというものを、今つくっておく必要がある。という考えの中で、どうかご理解、ご協力をいただきたいと思っております。

ちょっと堅苦しい話になりましたけれども、やはり皆さんのお力というのが一番大事であって、我々もそのためにどういった応援ができるのか、応援をしなければならないのかということは、膝を交えてこれからよくお話をさせていただきたいと、ご相談させていただきたいと思っておりますので、ご協力をよろしくお願いいたします。

最後になりましたけれども、このフォーラムが、これからの佐田地域の将来を考える上で、皆様お一人お一人に実りのあるものになることをお祈りいたしまして、ご挨拶とさせていただきます。本日はどうもありがとうございました。

**三島（貴）** ありがとうございます。続きまして、本日のフォーラム開催に当たり、ご助成をいただきましたY S市庭コミュニティ財団理事長、東島信明様からご挨拶をお願いいたします。

**東島** ただいまご紹介いただきました、Y S市庭コミュニティ財団の東島と申します。本日のフォーラム、持続可能な佐田のまちづくり、このフォーラムの意義というのでしょうか、私はこのように考えております。

皆さんもうご承知だと思うのですが、佐田に住む皆様が過去を振り返って、今を思う。そして考えて、ちょっと先の未来をまた皆で話し合いをしましょうよ、そのコミュニケーションが大切なので、その場をNPO法人スサノオの風さんが提供なさっていらっしゃる

る。一番大切なのは、コミュニケーションをするということなのだというふうに、私は理解しております。

一方の私の財団、YS市庭コミュニティ財団なのですが、財団の名前に「市庭」とつけております。わざと市に庭と書きます。普通ですとマーケットですから、市に場所の場ですよね。ではなぜ市と庭にしたのかということは、スサノオノミコトの古代からつい最近まで、今もそうでしょうけれども、神社仏閣の境内、または川の洲は、昔から神聖な場所というふうに考えられて、そこで人々は市、物と物を交換する、お金ができたときはお金と物を交換する、その場と考えておりました。

その神聖な場で必要なものはコミュニケーションです。というわけで、このフォーラムのキーワードのコミュニケーション、私たちのキーワードのコミュニケーションが結びついて橋が架かっていると、私はこういうふうに考えております。このフォーラムが実り多きものになりますように、私は祈っております。よろしくお願ひします。



**三島（貴）** ありがとうございます。それでは早速、基調講演のほうに移りたいと思います。準備が整いますまで今しばらくお待ちください。

それでは大変お待たせいたしました。今から基調講演のほうに移ります。島根大学教育学部 作野広和教授から、「元気が出る佐田の未来像～地域ビジョンをどう描くか～」と題して、基調講演をしていただきます。それでは作野先生、よろしくお願ひいたします。

## 基調講演

### 「元気が出る佐田の未来像～地域ビジョンをどう描くか～」

島根大学教育学部 教授 作野広和



よろしくお願ひいたします。皆様こんにちは。いただいたタイトルで進めさせていただきたいと思ひます。まず先ほど、さだラボフォーラムという言葉を出していただき、大変ありがとうございます。私ども、県内に5カ所のラボを持っておりますが、ラボフォーラムをこんなに盛大にやったことは初めてでございます。本当にスサノオの風の皆さんを初め、多くの方のご尽力に対し、心

から敬意を表します。ありがとうございます。

私ども、集落づくりとか地域づくりの研究とか活動をやっております。島根県内はもちろんですが、兵庫県、それから全国各地でやらせていただいております。特に、出雲市ではあまりフィットしないのですが、地域運営組織の構築とか再構築、こういう研究をやらせていただいております。また明日は米子市で高校教育に関するセッションにも出るのですけれども、今学校の魅力化、高校の魅力化、これも大きな仕事になっております。

昨日は兵庫県の佐用町で、こういう民活フォーラムというのをやってまいりましたし、来週は邑南町、再来週は飯南町、そしてまたその次の週も飯南町、そして14日は豊岡とか、今年度末ですから、毎週何かがあります。

そして、こちら佐田町では、地域の皆様が非常に元気よく頑張っていらっしゃるのですが、長年の地域のあり方というのに、少しずつ制度疲労みたいなものがあるのは率直なところでございます。それに対して、どうやったらより良い方法になるのかなということを考えて、少しずつ勉強会も始めさせていただいております。

そうした中で、ラボができたということもありまして、今年度佐田のほうで大きい調査をやらせていただきました。次に発表する立花のほうの詳細をお伝えしますが、私のほうは立花と一緒にやった全世帯調査についてご紹介申し上げます。

その前に、佐田の地域課題というのはお分かりのとおりだと思います。人口が減る、世帯数も減るという中で、人口ピラミッドもごらんのように、圧倒的に高齢者が多い訳ですね。でも、先ほど理事長がおっしゃったように、地域がなくなるということはないのです。住む人は少なくなっても、誰も住まなくなることはあり得ない。少なくともここにいらっしゃる皆さんが、命がある限りそれはない。

ということは、いい地域であってもそうでない地域であっても、ここに佐田はあり続けるわけですから、どういう暮らしがいいですかということになります。おそらく全ての方が、住みやすい地域を目指されると思います。そのためにどうしたらいいのだろうか、こう考えるわけでございます。

まずは、さだラボをつくったのは今年度初めてですので、全世帯に調査をしてみようと。これは、私はこういうことがいかに大変か、ずっと20年以上仕事でやってきておりますので、こういうことをやるのは恐れ多いのですけれども、立花がぜひやりたいというふうに言うものですから、覚悟を決めてやりました。

ここには詳しく書いておりませんが、佐田自治協会、それから13の地域振興協議会の皆様にご協力いただきまして、全て自治会さんを通して、自治会長さんのお世話をいただいて、こうして配布も回収もしていただきました。こんな地域はないと思います。20、30はあります。でもこちらは1,000世帯あるのです。基本的に全部配らせていただきました。すばらしいです。おかげ様で回収率が83%。でもこれは分母が世帯ですから、恐らくこの分母の中には、今お住まいになっていなくて自治会に入っておられる方とか、施設に入っておられる方、そういう方も入っていると思います。そういう意味では、90%ぐらいにご回答いただいたと、こんな地域はないと思います。心から感謝申し上げます。

その結果の一部を、ただいまご紹介申し上げます。単純な集計で恐縮なのですが、私たちは、この後、立花君が紹介する、若者の移住等を中心に論点を持って研究をいたしました。その中の問いの1つとして、出雲市内での移動経験がありますかという問いで、一番上、佐田町以外の出雲市から佐田町へ来たという方と、逆ですね、佐田町から佐田町以外の出雲市へ移動した方々。住んでいる方々にアンケートというかお問い合わせをして、そのうちの47.6%が、佐田町以外の出雲市から佐田町に来られたとご回答されている。その逆も33.7%ということで、かなり多いということで、人口移動といえますけれども、著しいと思います。

転出者の居住地域というのはどういう意味かという、今住んでいらっしゃる方々、世帯にお聞きして、その世帯の中で佐田以外の出雲市内に出られた方はいらっしゃいますか、というふうにお聞きしたのがこの欄です。ちょっとややこしいのですが、集計が1人～5人、6人～10人、11人以上ということで集計した結果、計算によると、ちょっとこれはわかりにくいのですが、最低でも2,338人、場合によっては4,934人が佐田町から佐田町以外の出雲市へ転出しているということが分かりました。それが分かったからどうなるというものではないのですが、それぐらい佐田から佐田以外の出雲市へ転出していらっしゃいます。

そして、その転出された家族の方々。これは出雲市以外の方も含まれます。そういう方々が佐田に戻ってこられるかどうか。あるいは佐田以外でも、出雲市内のどこかに戻ってこられるか、というようなことを聞きました。初めにこの緑色の側を見ていただきたいのですが、緑は何かというと、多分帰らないだろうということで。これは佐田にも出雲市にも帰らないということで、人口出しっ放しということでございます。

しかし、私たちはこの次の、37.4%に注目したい。これは何かというと、分からないというご回答です。今住んでいる方々に、出られた方々はどうかとお聞きしているのですが、分からないというのは当然なのですが、しかし、この分からないという人たちは、今後佐田に戻ってくる可能性がある人たちだと、そう考えることもできると思います。

その佐田町ですけど、現在、近所づき合い、ここでいう近所というのは自治会内に相当しますけれども、そういう人々とのつき合いをどう感じていらっしゃいますかということで、「とても大切にしている」それから「ある程度大切にしている」、もう相当数が地域、近所を大切にしていっています。少しありがちな、やや煩わしいと思うという方も11%いらっしゃいます。

これは、こういう近所を大切にされている状況というのは、自治会加入率に顕著に表れています。出雲市全体では、当時の数字で66.7%のところ、佐田町は90.8%。先ほどの回答率9割とほぼ同じですね。もう、全世帯が一体となって入っていらっしゃる。これは斐川町などと比べると、随分高くなっております。それだけ地域のつながりが強いということが再確認できました。

しかし一方で、この近所づき合いに対する意識で、やはりつながりを大切にしている人もいるのだけれども、否定的な意見がある方も当然いらっしゃいます。例えば「自治会の世話役・行事等人数はいるのに限られた人にしか回らない」とか、「そんな苦労は子供にさせたくない」というようなご回答があります。それから自治会のつき合いや、田んぼの草刈りは大変とか、他人のことを干渉し過ぎる。お住まいの皆さんも、そういうことを感じながらも住まわれている方が大半だと思います。

これは多分率直な感想ですし、近所づき合いを大切にしている人もそう思っていると思います。ですので、このことが直ちに悪いという意味ではなくて、こういう状況があっても佐田に住みたいかそうでないか、暮らしやすい地域にしていけないといけない、そういうことが大切だと思います。

今住んでいる方は、今後も住み続けたいですかという定住意思のことをお聞きしましたら、45.2%の方がずっと住みたい、そして19.7%の方が当分の間は住み続けたいなのですが、定住意思はあるのですけれども、25.7%の方が今後のことはわからないとお答えになっています。正直、意外と高いなと思いました。9割の方が自治会に加入されているのに、若干、誰も人生わかりませんので、今後のことはわからないというのは正直な言葉だとは思いますが、それにしても少々高いなという印象です。

今ここにお住まいでいらっしゃる、今後も住み続けたい理由は何ですかというふうにお聞きしたところ、自宅があるからという当然の回答もありましたが、それに次いで、地域への愛着があるとか、先祖代々住んできた土地があるとか、そういった回答がありました。いわゆる日本古くから続く、伝統的な世帯継承の考え方があるのですけれども、こういった考え方を持っている人が、今後もいつまで続くのかは未知数でございます。

こういった佐田町の実態を鑑みて、次の「元気が出る地域づくりのための方策」というところへまいりたいと思います。先ほど財団の理事長さんもおっしゃったように、いかにコミュニケーションをとって、この地域をよりよい地域にしていくか、もうそれに尽きるわけです。そこに答えはないのですけれども、しかし、作戦はあるのではないかとということでございます。

その前に、私が皆さんにお伝えしたいのは、まず佐田がこれまでやってこられたことは、大変素晴らしいことです。きょうは佐田町以外の方もたくさんいらっしゃいますので、ご紹介申し上げます。

佐田町では、出典に書いておりますけれども、まちづくり計画というのを旧佐田地域で持っていていらっしゃいます。そこには6つの地域としての目的というのですか、こういうまちづくりをやっていきましょうということを、設定していらっしゃいます。そして何とんでも、振興協議会と呼ばれるコミュニティ・ブロックというのを、全国の中でもいち早くつくられています。ここは窪田のコミセンのホームページに書いてあったのを発見して、素晴らしいなと思って、ここでも改めてご紹介いたします。



このコミュニティ・ブロックというのは、「しなければならないことは特に決めず、住民自らが地域を見つめ、話し合いを経て、自発的な活動を行うことが基本」とされています。そして、コミュニティ・ブロックというのは「自治会の上位機関ではなく、新たな地域の活動の単位である。地区のサークルやクラブを取り込みつつ、文化、体育、環境美化、健康福祉、産業などの部会を編成するなど、既存の組織をうまくまとめ、無理のない活動に心がけている」こと。このように書いてあります。

つまり自治会でもない、コミュニティセンター単位の地区でもない。空間的にはその間になるのですが、しかしこの上位関係はないというふうに、高らかに宣言しているのですが、この図は上下関係にありますね。ここで本当はもうちょっと笑ってほしいところなのですが。もう、佐田の人は笑うに笑えないという。よその地域の方はよくわからないと思いますけれども。

そういう、私は地域運営組織というものの全国の研究会のメンバーでもありますが、まさに地域運営組織をこちらでつくられたのですが、こういうことですね。いろいろな人たちがともにまとまる、コミュニティのプラットフォームづくりなのですけれども。いろいろな地域の環境の中で、コミュニティ・ブロックというのが、この地域の空間階層の一部に、完全に組み込まれているというのが現実だというふうに思います。中には当然と思っていられっしゃる方もいらっしゃるでしょう。

旧佐田町が中学校区です。そして2つの小学校区にコミセンがある。そこに自治協会さんとか、地域振興協議会の連合会さんがあって、そして6と7の振興協議会がある。それで、26と30の自治会がある、こういう4階層になっているわけです。人口3,300人、先ほど3,100人ぐらいとおっしゃいましたが、3,000人余りの町に、4つの地域の住民自治の階層があるというのは、これは正直申し上げて、相当構造的には厳しい。これは私が5年、6年前に呼ばれたときから、強く申し上げております。

どうしても何かやろうとすると、何人ものキーパーソンにお伺いを立てないと動かざるを得ない、という状況でございます。確認ですけれども、そのことが私は悪いとは思いません。悪くはないのですけれども、やはり柔軟性に欠ける、機動性に欠ける。またこういう構造になるという、そのこと自体も、私としては十分承知をしているつもりです。そうであっても、やはり不便が生じている。

ではどうするのかということですね。先ほど理事長さんがおっしゃったように、これを改革していくのを、既存の組織の改編をやっていくのかということですね。私としては、かなり難しいと思っています。なかなかこれは長い歴史というか、振興協議会とて長い歴史を持っている中で、恐らくこの構造を変えることは相当難しいだろうと思います。

では、新しい組織を立てるか。出雲市の場合、よくも悪くもコミュニティセンターというのが、地域運営組織形態というよりも、こういう階層構造の中に位置づけられているのです。それによってエネルギーを得ている面もあるのですけれども、では別の地域運営組織を立てますか、例えば佐田全体で1つつくりませんか。多分それも難しいです。

ではどうしたらいいかという、私からの提案としては、既存の組織を生かした手法を模索する必要があるだろうと、このように思っております。

既存の組織を生かして、どう変えるかという、既存の、この左側の階層構造というのは、基本的に家の集まりですね。世帯種の集まりである。だから、守りには強いけれども攻めには弱い、柔軟性に欠ける。人の集まりにさせていただくようなものが欲しい。

それから、地域のことをみんなで考えるプラットフォームが必要だと。これは重ねて申し上げますが、地域振興協議会がそうだったはずなのですけれども、なかなかそうではない役割も担っていらっしゃるということですね。

そして、きょうのテーマであります、地域を計画的に運営する、地域のビジョンを持って進めていこうと。これもある程度、冒頭ご紹介したように、佐田にはあるのはあるのですけれども、それに基づいてみんなが心を一つにしているかという、そうではないということです。

よく地域づくりは、リーダーが重要だとかって言いますが、私はそんなことは思っていません。それは結果論なのです、リーダーが活躍したかどうかは。この後、多久和さんがご発表されると思いますが、ああいう方は稀有な存在です。なかなかそんな方を待つてはいられないです。1人のリーダーよりも、みんなでやっていくということが大事であろうと思います。

この図というのが、みんな組織でございます。この、4階層であろうが3階層であろうが、とにかくここをいちいち個別協議するのではなくて、ある程度一括して、こういうやる気のある人、元気のある人の集まりを設けていただく。そこには普段、こちら側では声が反映しにくい若者や女性や子供の声を反映する。あるいは出身者とか事業所、関係人口と呼ばれるような人たちが、寄ってたかって地域のことを考える。

そして、大事なのは、ここで縦に書いておりますが、それを地域の文脈を無視してやるのではなくて、地域の文脈を斟酌して、地域の実態に合った活動をする。この左と右が相互に信頼できるような関係ができると、佐田はうまくいくのではないかとというのが、私の提案でございます。

もしかしたら現在の佐田自治協会でやっていらっしゃる小さな拠点部会が、今はこの組織から出ておりますが、さらに独立して、この小さな拠点部会あたりがそういった動きになるかもしれませんが、このあたりのところは地域で十分話し合ってくださいといいのかなと思っております。

いずれにしても、地域後任の地域づくり実行集団ですね。こういったものが必要なというふうに思います。

それでは、その組織は何をやるのかということなのですが、地域づくりの方程式というのは、もうこの10年ぐらいで完全に確定しております。それは何かというと、地域課題の解決と地域資源の活用。「守り」と「攻める」です。この2点でやっていく必要があります。

今のところ組織と課拠点とか、何となくあるのですけれども、今ないのは計画づくり、そして人づくりという部分だと思います。計画づくりで地域のビジョンをつくっていく、それもみんなで作る。それからそのビジョンを、みんなで作るときのプロセスが大事です。この後、比田のご報告もありますが、そういうことを大切にされた報告がありますので、ぜひお聞きいただければと思います。

そして私のほうが主張したいのはここなのです。嫌われてもいいから言いますが、やはり地域のことは、住民がやらないといけないというのは正しいのです、一義的にはそうなのですけれども、これは住民だけではできません。もう断言します。必ず行政も入らないといけません。

多くの町は住民と行政が、協働というふうに言われますけれども、先ほど、三島さんのご挨拶で、住民の皆さんがビジョンを持ってとおっしゃった。そのとおりです。でも、行政もビジョンを持っていかないといけないのです。行政が一部過疎である佐田町や多伎町をどう見ますか、どういう地域にしていきたいですか。行政側もメッセージを発して、住民側もそれに呼応して、対応しないとイケない。

だから私は、せっかくこういう機会をいただいたので、偉そうに断言しますが、来年度は難しいのですけれども、再来年度はぜひとも行政を動かして、行政側も見立てをつくっていただきたいというふうに、強く思っております。

私、プロフィールに書かせていただいておりますが、総務省の過疎問題懇談会の構成員で、来年度で過疎法が失効しますけれども、再来年度以降どうするかということを検討する国の委員の1人ですけれども、議事記録も公開されておりますので、発言していいところは発言できると思いますが。恐らくですけれども、一部過疎は残ると思います。そういう意味で出雲市さんもチャンスですので、過疎計画というのをきちんとつくっていただいて、多伎や佐田がどういう地域であるべきかというのを、きっちり示していただくと、多分佐田の皆さんというのは元気にやられると思います。

そして、もう1つですけれども。住民と行政だけでもなかなか大変なのです。これはどうしてかという、大体1対1というのは対立構造になるのです。間にNPOとか大学とかが入る。そういう意味では、非常に手前味噌ですけれども、佐田町にはスサノオの風さんという素晴らしいNPOがありますし、私ども「さだラボ」もしっかりと応援というか、一緒に入って検討を続けさせていただきたいと、このように思っております。

事例というよりは、次に出すのは、本当はでは地域のビジョンをどうやってつくるかということを出そうとしていたのですけれども、皆さんにはやはり、時間の関係もあるので、分かりやすい例があったほうがいいたろうと思って、ちょっと「トイトイ」さんの例を借りてきました。

阿東町というのは、山口市とそうでない部分があるのですけれども、ここは山口市の阿東地福地区というところの例でございます。人口1,269人、山口市の一部の地区になっております。よく見る中山間地域の小規模高齢集落、高齢化率51%です。ここでは10年前ですか

ら平成 22 年に、地区内唯一のスーパーが閉店したことによって、買い物ができないという不安が広まりました。

勿論それまでも、過疎化高齢化というのはあるのですけれども、スーパーが閉店するということで一気に危機感が高まったのです。やばい、地域はピンチだということで、どうしたらいいかというようなことで、結果的にトイトイという NPO 法人さんが立ち上がったわけなのですが。

その前に地域の人たちが何を考えられたかという、対処療法的に、買い物ができないから買い物をどうするか、高齢化で移動ができないから移動をどうするかと考えるよりも、原因そのものを解決するというような、原因療法的なアプローチをとられて、いろいろと議論された結果、地域の自信と誇りを取り戻すことが重要であろうと。その結果として、例えば買い物の課題についても対応しようと、そういうことを考えられました。

では、自信と誇りがなくなった今、不安になっているのは何なんだろうか。不安を安心にするためにはどうしたらいいのかということをお話し合われたら、地域のよりどころとなる拠点をつくる必要があって、そして地域の課題を自分たちで解決することで、安心して暮らし続けられることのできる故郷をつくる、こういうことを目指されました。

この地福の地区では、地域拠点というのを重点にされました。佐田でこれをすべきだと言っているわけではないです。佐田では、話し合ったら違う要素になるかもしれません。やはり、はっきりしているのはここなのです。地域の将来ビジョンを明確にするということ、共有化する。多くの中山間地域は、大体こういうお話をすると、私が話し終わったときから「そんなものできない」と、こう言ってしまうのです。言われる方がいらっしゃるのです。できなくても別にいいですけども、ではどうするのですか、ということなのです。

冒頭申し上げたように、できなくても地域は残るのです。だから悲惨な暮らしを続けますか、それとも少しでもいい方向に行きますか、どちらですかと言われたら、少しでもいい方向だと思いますよね。そのための手段を私がお伝えします。

もう 1 人、こういうことを必ず言われます。「お前が言うのは理想だ」というのを。大学の教員ですから、理想を言うのは仕事なので、正しい答えを言っているのです。そうではなくて、多分言葉を変えると、やるのは大変だということをおっしゃりたいのだと思います。何で大変かという、多分同じメンバーで話し合っていると大変なのです。違うメンバーで話し合うというか、いろいろなメンバーが入ることが大事なのだと思います。それは先ほど申し上げたように、地域住民だけではなくて、行政さんも第三者も入ることがポイントだと思います。

さて、こちらの地域に話を戻しますと、平成 23 年 11 月に、地福ほほえみの郷構想を提案しました。先ほどのスーパーがなくなったのが平成 22 年 2 月です。平成 23 年の 11 月、1 年半から 2 年弱で、もう構想はできています。ビジョンというのはある程度のスピード感を持ってつくらないといけません。そのビジョンを持って、地域の人に説明をして、ほほえみの郷トイトイというのをつくられました、これは何かというと、ここは先に理念ですが、

幸せに暮らしたいというのは何度も強調しておりますが、こういう場ですね。もともとスーパーがあったところを、地域づくりの拠点にしていく。そして、マーケティングとマネジメントを実施していく。そういう場に改革されました。

これは成功事例ですね、ここからは。こんな美しい話がどこも行くとは思いませんが、1つは先ほどの、一義的に買い物不安の解消ということで、ミニスーパーをつくられました。それに付随して、移動販売車というのもやられています。この方は女性ですが、後で出てくる男性のスタッフが、自分もそういうことをやりたいということで、Uターンしてこられて、今その方が地域の人気者です。それからお弁当を届けるとか。この男性の方ですね。このお兄ちゃんです。先ほどの、移動販売もやられているのですけれども、介護予防として健康づくりで、元気で生き生きと暮らし続けられる取り組みというようなこともやられています。

既に佐田でもこれらの一部はやられていると思います。最低でも須佐と窪田の地区単位、ないしはこの佐田全域で、こういうビジョンに基づいて何が必要かを考えて、それをみんな考えて、一つ一つ実行していくということが大事なんだというふうに思います。

ポイントは何かというと、買い物ができるということや配食をすとか交流をすというだけではなくて、その結果地域の人に笑顔が生まれて、それが愚痴ばかり言うのではなくて、笑顔によってこの地域いいねと言える、そういう地域にしていく。そんなもので飯が食えるかという人が必ずいますけれども、飯を食う種は別なところにあるわけですね。皆さん出雲市とかに通勤されているわけなのですよ。

佐田で住む必然性って何なのかというようなことを、もう一度考え直していただきたいです。この地福地区では4つの柱で、伝統や歴史を大切に、未来を見据え、人を中心として、そして生活をビジネスに変えるというような視点ではやられていますけれども、これは地福のスタイルで、佐田は佐田のスタイルを模索する必要があるというふうに思います。

こちらは、吉島地区というのは皆さんご存じだと思いますけれども、日本で一番できた地域と言われていています。こちらは完成形だと思ってください。もともとこちらでいうコミュニティセンターみたいところがNPO法人化して、「きらり吉島」というのをつくって、ガンガン進められています。ここまでは行かないですけれども、写真を見られて、こういうことまでやっているのかということをごらんください。

本来行政がやるようなことかもしれないですけれども、地域でやることによって、地域の人参加し、そして地域のニーズに合ったことができるのです。その結果、地域に雇用も生まれます。そして地域に帰ってきたい、地域を支えたいという人もふえていっています。非常に複雑な仕掛けも正直言ってありますので、でき過ぎの例ということでご参考いただければと思います。

では最後に、そういう地域ビジョンを本当に描く場合どうしたらいいのかということ、簡単にお話して終わらせていただきたいと思います。お手元の資料は、スライドの抜粋をおさずに一部だけ載せました。お手元の資料の11ページと書いてある、これはページ数というよりも、益田市の資料の11ページなのですから。

ここはなかなかよくできていまして、益田市では地域運営組織である地域自治組織の設立のマニュアルがあります。これを参考にしてみてください。組織の立ち上げのマニュアルなのですけれども、実際には地域づくりのプランを立てるいいマニュアルになっております。特に19ページのほうを見ていただくと、ここに具体的にどういうことをやるべきか書いてありますので、参考にしていただければと思います。

上から順番に、手順とスケジュールの決定のためには、今日のようなフォーラムを開く。そして、まずみんなの考えを知ろうということで、アンケートとかそれから聞き取り調査、そして強みや課題を見つけようということで、町歩きや地元学、そしてみんなで考えようということで、ワークショップや円卓会議。そして具体化してみようということで計画をつかって、パブリックコメントなども得て、成案を得る。こういうプロセスが書いてあります。

もちろん地域の実態に応じてやり方はいろいろあるのですけれども、もしどこから手をつけていいのかわからなかったら、この益田市のマニュアルを参考にすると、非常によくできています。

私も、窪田地区ではやらせていただいたのですけれども、私はまちむら探検という、地域の皆さんが実際自分たちの地域を歩いて見て回るというようなことが、有効な手だてだと思っております。あの時は学生が歩いて回ったのですけれども、本当は地域の皆さんが歩いて見ないとはいけません。そうすると、必ず地域のいいところや課題が見つかるはずで、「たんけん・はっけん・ほっとけん」という言葉がありますが、探検したら必ず発見があって、発見したら必ず放っておけなくなる。いいところは伸ばしたい、課題があるところは直したいと思うのが常でございます。

そして、ワークショップ等をやるときは、この後比田からもご紹介あると思いますが、できるだけ世代別での対応をしていただきたいのです。特に子供の意見とか若者の意見というのは、圧倒的多数の大人、しかも60代、70代の大人の方々に、間違いなくかき消されます。それはそうですよね。私は国立大学の教員をやってもかき消されますものね。ですから、そういう場を確保しないと、なかなか難しいと思います。

益田なんかは、この豊川地区というのはすごく有名ですけれども、小学校が大人と一緒にワークショップをする、これは比田と違って世代別ワークショップではなく、世代ごちゃまぜワークショップ、一緒にやる。小学生も対等な意見が出るのです。そうすると、子供が言ったことに対して、大人はノーとは言えないので、仕方なく進めていくと、地域が変わっていくという例です。参考にしてみてください。益田市ではこういう年次成果を出していらっしゃいますので、地区単位でやっていらっしゃいますから非常に参考になります。

最後に、残された課題とまちづくりのコツなのですけれども、こういったことをやっていくのは、大概10年かかります。まちづくりは大体10年1単位です。今私、兵庫県の豊岡に通って来年度で10年、それで1クールであると。仮に令和元年度が1年度目だとしたら、10年間つき合っていないといけない。これはなかなか大変なことです。でも、それぐらいの覚悟を持ってやっていかないとはいけません。

いずれにしても、地域づくりには失敗はない。それから、そのかわり答えはないのです。だから難しいと思います。ですけれども、不可能はないというふうに思いますので、佐田の輝かしい未来に向けて、さらなる躍進を祈念申し上げて、講演とさせていただきます。どうぞご清聴ありがとうございました。



## 定住調査報告

### 「住み続けられる佐田づくり～佐田の若者定住動向～」

島根大学教育学部 4年生 立花祐樹

三島(貴) 作野先生、ありがとうございました。続いては、昨年の夏から佐田町全世帯を対象に行った定住調査や、UIターン者への聞き取り調査を行った結果の概要につきまして、島根大学教育学部4年、立花祐樹さんからご報告をお願いしたいと思います。

佐田町の皆様には、大変お世話になりました。ありがとうございました。それでは立花さん、よろしくお願ひいたします。

立花 失礼します。皆さんこんにちは。私は島根大学教育学部で地理を勉強しています、立花祐樹と申します。本日はこのようなすばらしい発表の機会をつくってくださったこと、そして3連休の中日なのに多くの方がおいでくださったこと、本当にありがとうございます。

私は今、タイトルにも出ています、出雲市佐田町におけるUIターンの実態と若者世代の定住動向に関する研究を、1年2、3カ月行ってきました。それについての発表を、今から行いたいと思います。今このスクリーンに映し出されるスライドは手元の資料にもあるのですが、手元の資料から少し修正した部分もありますので、ぜひ前のほうに注目して発表を聞いていただきたいと思います。

それでは発表を始めさせていただきます。発表構成としましては、以下のとおりとなっております。



なぜこの研究をしようと思ったかという、まず日本社会というのは少子高齢化、人口減少が進んでおりました、特に地域で課題の多様化、顕在化が起こっております。そして、地域を支える力の低下というのが言われていると思います。それを解決する手段として、担い手、外部人材の確保というのが言われていまして、そこから移住・定住研究の重要性というのが叫ばれていましたので、この研究をやろうと思いました。

研究の目的としては、以下の4点を挙げます。1点目は合併町村、本研究では佐田町です。それと被合併し、本研究では出雲市となっているのですが、その人口移動の関係を明らかにすること。2点目は移住・定住を促す要因や、移住者の移住の経緯を明らかにすること。そして3点目は転出者の実態把握や、転出者とU I ターンの生活状況などの比較を行うこと。4点目は、若者U I ターンが地域の人口動態に与える影響について分析することです。この4点を研究の目的とし、最終的には将来の地域のU I ターンを展望していきたいと思っております。

研究対象地域は、島根県出雲市佐田町です。選定理由なのですが、今回は2点挙げさせていただきます。1点目は、佐田町というのは合併町村であるため、被合併市の出雲市との人口移動の関係というのを検討できること。2点目は、移住・定住研究で課題となっていた、転出者調査が実施可能であった。この2点を選定理由として挙げます。

では続いて、若者U I ターンに対するヒアリング調査の検討を行っていききたいと思っております。調査対象者は20代から40代の若者U I ターンの方です。調査期間は3カ月で、数えてみたら34回も佐田町に通わせていただきました。Uターンが25人、Iターンが29人、その方々にヒアリング調査を実施させていただきました。

対象者の性別と年代ということなのですが、Uターンは男性が多く約8割、Iターンはその真逆で女性が多く、約8割となっていました。年代は20代、30代、40代と3つに分けたのですが、30代がU I ターン共に多いという結果になりました。特に20代の情報というのはほとんど集まらなかったもので、20代の若者というのは転出しているのではないか、ということをおもいました。

続いて世帯構成なのですが、ここからU I ターンを2つに分けて、比較していききたいと思っております。黄色で囲ってあります2世代同居が最も多く、夫婦のみや1人暮らし、青で囲ってあるところというのは少ないという現状でした。

職業なのですが、U I ターン共に正社員の会社員が最も多い状況でした。上に注目していただきたいのですが、こちらは島根県のU I ターンの職業ということで、こちら最も多かったのが正規の会社員ということで、佐田町のU I ターンの職業というのは、島根県の傾向と類似しているということが明らかになりました。

続いてU I ターンの前住地なのですが、前住地というのは、佐田町にU I ターンする直前に居住していた地域を指します。こちらをU I ターンで見ると、1位は共通しておりまして、出雲市を除く島根県が最も多く、2位、3位も共通しているところがありました。一



方、これを島根県のU I ターンの前住地と比較してみますと、1位が東京都ということで、こちらは先ほどの職業と違って、佐田町と島根県で差異があることが明らかになりました。

続いて、移住の直接的な理由や決定要因なのですが、Uターンは自分の意思というのが最も多かったです。そこからは佐田町への愛着というのが考えられます。一方、Iターンというのは、女性や配偶者が本研究では多く、「その他」が最も多くて、随伴移動や結婚移動で占められていました。

続いて、転入する際に弊害と感じたことなのですが、こちらで注目していただきたいのはオレンジの部分です。「地域社会へとけ込めるか不安」という要素です。これはUターンでは3位、Iターンでは1位に入っておりまして、佐田町で移住してきやすい雰囲気をつくる必要があると考えます。

続いて生活状況なのですが、U I ターンして生活面の変化というのを比較してみたいと思います。Uターンでは、青で囲ってあります「ゆとりが出た」が53.8%、一方Iターンは、緑で囲ってあります「以前より忙しくなった」が53.6%ということで、Uターンのほうに生活面ではプラスの変化が表れていることがわかりました。

続いて、精神面の変化なのですが、青で囲ってあります「豊かになった」を比較すると、こちらもUターンのほうが豊かになった割合は高くなっています。一方Iターンは、緑で囲ってある「以前より悪くなった」が20%存在しておりまして、2割の方が精神面の悪化というのを訴えておられました。

続いて、地域行事への参加状況を見ていきたいと思います。地域行事を「祭り・スポーツ」などの行事、「草刈りなどの活動」「自治会等の会合」3つに分類しまして、その参加率をまとめました。Uターンでは、青で囲ってあります「自治会等の会合」に注目していただきたいです。「ある程度参加」そして「積極的に参加」している人の割合というのは、合わせると65.4%という結果になりました。一方、Iターンで注目していただきたいのは、祭りやスポーツなどの行事です。これは「ある程度参加」「積極的に参加」で75.8%を占めていました。

これを島根県のU I ターンで、地域活動等に参加し、地域とかかわっている人の割合を比べると、それは13.6%ということで、いかに佐田町のU I ターンの方が、地域の活動に積極的に参加しているのかというのが、ここから分かると思います。

続いて定住意思を見ていきたいと思います。青で囲ってあるところが、佐田町で定住していきたいと回答した人の割合です。これを見てみると、UターンのほうがIターンより高くなっています。上に注目していただきたいのですが、出雲市が調査した出雲市全体の定住意思83.1%よりは、高いUターンであっても低くなっていることがわかりました。

続いて定住の決定要因を見ていきたいと思います。Iターンは回答が分散する結果となりました。一方Uターンでは、「この土地に愛着がある」が最も多かったです。また「田畑や森林を守りたい」だとか、「家を守りたい」など、世帯継承に対する伝統的な考え方、先ほど全数調査でも申し上げたのですが、それが存在していることが明らかになりました。

続いて、定住を困難にさせる要因なのですが、こちらはU I ターン共通していました。黄色のアンダーラインが引いてあります、「市内や都会の方が生活に便利」というのがU I ターン共に最も多く、生活の利便性の面で定住を考えられていないということが明らかになりました。

続いて、移動歴の類型化というのをU I ターンで見ていきたいと思います。大都市圏を経由してきたのか、非大都市圏を経由してきたのか、2つで分類させていただきました。大都市圏経由型というのは、佐田町出身者が転出をして、大都市圏を経由して佐田町にUターンするパターンです。一方、非大都市圏経由型というのは、佐田町出身者が非大都市圏を経由して佐田町にUターンするパターンとなっています。こちらの人数を比較してみますと、13名と12名ということで、ほとんど差異はありませんでした。

続いてIターンのほうなのですが、直接流入型と経由型で、合計4つに移動類型を分類しています。これを一つ一つ、説明はしないのですが、ある傾向が見えてきました。下を見ていただきたいのですが、大都市圏出身者というのは、佐田町に直接流入する傾向にあります。一方、非大都市圏出身者というのは、大都市圏を経由してから佐田町に流入する傾向にあります。

では、2章の小括をしていきたいと思います。Uターンというのは男性、Iターンは女性共に8割、そして30代が多かったです。また前住地というのはU I ターンで類似しています。またU I ターン共に、移住する際地域に溶け込めるかというのを不安に感じておられる方が多く、移住者を受け入れる雰囲気づくりの必要性があると思います。また特に、Uターンのほうが地域の活動に参加しているということが明らかになりまして、生活の利便性の面から、佐田町に定住できないと考えているUターンが多いということが明らかになりました。

では続いて、3章に移っていききたいと思います。3章は、佐田町から転出された方、転出者の実態調査から検討していきたいと思います。

まず調査の概要です。20代から40代の転出者の方に調査票を配布するという形で、調査を行いました。スサノオの風の職員さんにすごく協力していただいて、77名もの転出者をリストアップすることができました。今までほかの先輩方も、転出者の調査をやろうとしていたのですが、こんなに転出者を集めることができたというのはほとんど例がなくて、本当に協力してくださってありがとうございます。回収率は57.1%、44名から回収することができました。

ではまず、基礎的な属性です。性別と年代から見ていきたいと思います。性別は女性のほうが多く、約7割が女性でした。一方年代は、U I ターン同様30代が多い結果となりました。

続いて世帯構成を見ていきたいと思います。U I ターンと同様、丸で囲ってあります2世代同居が最も多い結果となりました。これをU I ターンの世帯構成と比較すると、夫婦のみの世帯というのは10%以上増加しています。一方、3世代同居というのは、U I ターンに

比べて 20%以上減少しています。なので、転出者のほうが現代の世帯構成に近い形であるということが明らかになりました。

続いて職業なのですが、こちらは青で囲ってあります、正社員の会社員が最も多くなりました。こちらでもU I ターンの職業と比較しますと、自営業や農業、自由業などの職種というのが、転出者では存在しませんでした。なのでU I ターンに比べ、職種が限定されている可能性もあります。

続いて転出の要因なのですが、「その他」が最も多くなりまして、「その他」の詳細から、類型を4つに分類しました。多い順に「進学型」「結婚型」「就職・転勤型」「都市生活希望型」この4つが転出要因の類型です。

転出後、最初の居住地はどこなのかということなのですが、1位は出雲市、2位が出雲市以外の島根県、3位が山口県を除く中国3県と東京都となっています。ここから、転出後の最初の居住地というのは、ある程度近隣であるということが明らかになりました。

続いて現在の住まいを選んだ理由というのは、多様な答えがありました。ここを順位づけしますと、1位が「配偶者や家族の出身地だから」2位が「買い物等日常生活が便利だから」3位が「住宅価格、家賃が適当だから」、この3つが多く挙がりました。

続いて転出者の生活状況、生活面、精神面の変化を見ていきたいと思います。生活面のほうをまず見ていただきたいです。「以前より忙しくなった」と回答した人が最も多く、こちらは先ほどのIターンと似た傾向を示しました。一方精神面なのですが「以前と変わらない」が最も多く、これはU I ターンに比べ、精神面の変化が少ないということが明らかになりました。

続いて、佐田町に居住していたときの佐田町での暮らしやすさなのですが、「まあまあ住みやすかった」「とても住みやすかった」と回答した人で、66%を占めていました。なので転出者というのは、佐田町を暮らしやすい地域と捉えている場合が多いということが明らかになりました。

続いて、現在の暮らしに対する満足度というのを、現在佐田町在住のU I ターンと比較してみたいと思います。青で囲ってあるところが満足の値なのですが、こちらを比較すると、転出者のほうがU I ターンより、現在の暮らしに対する満足度は高いということが明らかになりました。

では、帰還意思を見ていきたいと思いますのですが、「佐田町でもう一度暮らしたいと思うか」という問いに対し、「少し思う」「強く思う」と回答した人で41.9%を占めていました。なので、転出者の41.9%に帰還意思があると判断しました。

では、3章の小括です。U I ターンと同様に、転出者は30代の方が多いです。また、職業というのはU I ターンに比べ限定的となっております。そして、近隣に転出する傾向がありまして、配偶者や、家族の出身地であるケースが多いです。また、佐田町での暮らしにくさを感じているケースというのはすくなく、転出者の4割に帰還意思が存在します。

では、これをもとに結論を見ていきたいと思います。

こちらは居住地域と帰還意思なのですが、こちらは図で説明していききたいと思います。まず出雲市のところに注目していただきたいのですが、出雲市の転出者数というのは大きい青い丸ということで、多い状況です。しかし帰還意思というのは、点線の矢印ということで、低くなっています。

一方、中国地方はどうかというと、中国地方の転出者というのは中程度存在しています。一方帰還意思というのは太い矢印となっておりまして、帰還意思は高くなっています。これを大都市圏まで範囲を広げてみると、転出者数は少なく、帰還意思は普通という状況でした。出雲市への転出者というのは、数は多いのですが、帰還意思は低いという状況です。これが佐田町の人口減少のメカニズムであるという結論をつけました。

続いて人口動態へ与える影響への期待値を、U I ターンの類型から見ていききたいと思います。本研究ではU I ターンを4つの類型に分類しました。1つ目が「夫Uターン型」、2つ目が「妻Uターン型」、3つ目は「単身夫婦Iターン型」、4つ目が「単身Uターン型」です。この4つの累計で最も多くなっていたのが「夫Uターン型」、一方「妻Uターン型」というのは最も少なく、1組という状況でした。人数1人につき1ポイント、子供1人につき2ポイントの合計で、人口動態に与える影響への期待値というのを算出しています。

注目していただきたいのは、丸で囲ってあります「夫Uターン型」と「単身Uターン型」です。まず、「夫Uターン型」というのは、妻の方は全てIターンという状況でした。なので「夫Uターン型」は随伴・結婚移動の促進をしていることが明らかになりました。

一方「単身Uターン型」というのは、現在期待値はそれほど高くないのですが、今後の結婚で随伴移動や、結婚移動の促進が期待できます。

続いて、若者U I ターンが年齢別人口に占める割合を見ていききたいと思います。まず、本研究では全てのU I ターンをリストアップできていないこと、これを前提として置いていただきたいです。なので実際はさらに多くのU I ターンが存在することは確実であるという状況です。

男女で20代、30代、40代で、どれくらいU I ターンに占められているのかというのを、上の%が示しています。注目していただきたいのはオレンジで囲ってあります30代なのですが、男性は37.8%がU I ターンで占められておりまして、女性は40%を超えて、41.7%がU I ターンで占められているという状況でした。

ここからはU I ターンの展望をしていききたいと思います。まず、展望していくに当たり重要となってくるのは、中間支援組織NPO法人スサノオの風の存在がとても大きいのではないかなと思います。皆さんおわかりだと思うのですが、佐田町の様々な取り組みの中心になっておられまして、毎月多くのイベントを開催していることは、ご承知の通りだと思います。

これからU I ターンを展望して掘り下げていく中で、重要となってくる言葉が2つあります。これをまず押さえてから、さらに深掘りしていききたいと思います。交流人口と関係人口というこの2つの言葉を、今押さえていただきたいです。

交流人口というのは、観光などで佐田町に訪れる人を指します。一方関係人口というのは、その地域とかかわりがあって、居住地と佐田町を行き来するような人を関係人口といいます。この2つの言葉というのを押さえてもらって、次に展望の続きをしていきたいと思いません。

スサノオの風がイベントを行うときの主要スタッフなのですが、それを調べてみると、UIターンの割合というのは52%ということで、UIターン中心で運営されていました。一方、町外スタッフの割合というのも43.4%存在しておりまして、先ほど押さえました関係人口もここに確認できます。なので、若者UIターンと町外スタッフで、主要イベントスタッフの95.4%を占めているという状況になります。


一方、2019年12月8日にあるイベントが行われたのですが、その来訪者を見てみると、町内からより町外から訪れた人が多くなっています。ここから、先ほど押さえました交流人口というのが確認できます。それをもとに展望していきたいと思うのですが、若者UIターンを中心とする活動の継続を、さらに続けることによって、交流人口の増加や、転出者の佐田町への認識の変化というのが生まれると思います。そこから関係人口の増加、そして最終的には新規UIターンの獲得につながるという展望を行いました。

それでは、3つの調査から導いた結論を見ていきたいと思うのですが、まず全世帯調査から見ていきます。先ほど作野先生が発表してくださったのですが、佐田町から出雲市への人口流出というのが確認できました。そして、地域別に見ると出雲市に最も住民が転出しています。今後について決めていない転出者が数多く存在することから、これが将来の佐田町の人口動態を左右する重要な層であるという結論を導きました。

続いて、UIターンの実態調査からの結論なのですが、地域の中心となって随伴、そして結婚移動を促進する男性UIターンの動向に今後注視するべきという結論を導きました。そして先ほども申したのですが、活動の継続によって今後UIターンが増加する可能性もあります。

### 佐田町のUIターンの展望: ①

○中間支援組織: NPO法人スサノオの風  
 地域社会の発展に寄与することを目的とするNPO法人  
 ⇒佐田町の様々な取り組みの中心  
 毎月多くのイベントを開催



(NPO法人スサノオの風HPより転載)

2019年度NPO法人スサノオの風行事予定(抜粋)	
実施日	事業内容
1月9日	スサノオの風交流会
8月16-17日	ホール魅力体験事業「ホールのさだこさん」
9月	西藤将人 ひとり芝居ツアー
12月22日	SADA MUSIC SPACE
3月8日	劇団Yプロジェクト公演「映画に出たい」
7月~	英会話教室
通年	市民のアート展
9月	福祉講座「この町で暮らしていくためには」
11月3日	タイルクラフト教室
4月から3月 毎月第2日曜日	佐田町民交流マーケット「cotaba」
12月8日	佐田町体育館を教え！ 10,000人の何で

(NPO法人スサノオの風の活動計画書より作成)

続いて転出者実態調査からなのですが、転出要因の類型というのは限定的です。しかもそれは全て、佐田町への不満からではないという結論に至りました。そして、帰還意思のある転出者というのは4割存在しておりまして、これ

をUターン候補者であるという結論をつけました。

最後に、終わりにです。出雲市のU Iターンの現状を見てみますと、オレンジの線のグラフ、Iターンというのは年々増加しております、一方Uターンというのは減少しています。U Iターン数は、出雲市は県内トップクラスで、独身のIターン女性にターゲットを絞った支援を行っています。これは縁結び、出雲大社の影響があるのではないかと私は考えています。Iターンは増加しておりますので、一見この独身のIターン女性にターゲットを絞った支援というのは理にかなっていると考えられます。

しかし、先ほど言ったのですが出雲市全体というのは、女性Iターンに注視しています。しかし本研究では、佐田町というのは男性Uターンに注視すべきという結論に至りました。同じ出雲市内であっても、U Iターン施策に地域的差異が必要だと思います。佐田町の場合はUターンを重視するべきであると思います。

出雲市のU Iターンの課題としましては、U Iターンの地域的差異について検討されていないことが課題だと思います。そして、それがあって、地域によってはU Iターンの実態と施策というのが乖離している可能性も指摘できます。

なので、出雲市U Iターンへの提言としましては、出雲市は多くの町が合併して現在の出雲市がつくられていますので、地域的差異があるのは当然なことだと思います。なので、合併以前の各地域で、U Iターンの実態把握を行って、地域的特性に合ったU Iターン施策の構築というのが求められると思います。そうすることで、若者が暮らしやすい地域への第一歩に踏み出せるのではないかと考えました。

これで発表は終わりになるのですが、最後に一言感謝の気持ちを言いたいです。本研究というのは、島根大学の先生方から最も高い評価をいただくことができました。もちろんこれは、僕1人では絶対に無理だったことで、スサノオの風の職員さんを始め、行政センターの方や自治協会、そして振興協議会の皆さん、そして多くの調査に協力してくださった、全ての方の協力のおかげだと、本当に強く強く思っております。本当に皆さんに声をかけていただいた、頑張れという言葉がどれだけ力になったか、本当に図り知れなかったです。感謝しかありません。ありがとうございました。

自分は4月から出雲市の職員として働きますので、皆さんにいただいた恩というのを、少しでも多く返していけるように、一生懸命働いていきたいと思えます。これで発表を終わりたいと思えます。ご清聴ありがとうございました。

**三島(貴)** 立花さん、ありがとうございました。私も男性Uターンに随伴移動してきましたIターン女子でございます。

ここで、少し立花さんに質問等がありましたら、ご意見を伺いたいなと思うのですが、どなたかおられますでしょうか。今の場では恥ずかしいよという方は、フォーラム終了後にまたお時間がとってありますので、そちらのほうでご意見、ご感想等おっしゃっていただければと思います。

そうしましたら、続きまして、佐田中学校の2年生の発表に移りたいと思いますので、少々お時間をいただけたらと思います。

それでは続きまして、佐田中学校2年生 藤井恵照さん、小山瑠花さんのお2人から、私たちが考える佐田町について、発表を聞きたいと思います。それでは藤井さん、小山さん、よろしくお願いいたします。

## 佐田中学生が描く～佐田のデザイン～

佐田中学生2年 藤井 恵照

佐田中学生2年 小山 瑠花



**藤井** 皆さんこんにちは。私は佐田中学校2年の藤井恵照です。

**小山** 同じく佐田中学校2年生の小山瑠花です。きょうはよろしくお願いいたします。これから、私たちが考える佐田町についてお話します。

まず私たちは、このようなアンケートで、佐田中生が佐田町についてどのように考えているのか調べました。そ

して、その結果を「ひと」「もの」「こと」の3つに分けました。この「ひと」「もの」「こと」の3つがうまく重なれば、佐田町はさらにより町となり、発展していくと考えます。それでは、このことを踏まえた上で、アンケートの結果を見ていきます。

まず、佐田町のイメージについてです。結果はこのようになりました。この中でも多かった意見は、「自然が豊か」「地域の方が明るく心が温まる」「田舎」という意見でした。

次に、佐田町のよいところと悪いところについてです。まず、よいところの結果はこのようになりました。この中でも多かった意見は、「自然が豊か」「人が優しい」「仲が良い」「交流がある」という意見でした。一方で悪いところについては、このような結果になりました。この中でも多かった意見は、「人口が少ない」「お店が少ない」「交通の便が不便」という意見でした。

次に、佐田町に残りたいと思っている生徒についてです。結果は全校生徒67人に対して、65%でした。この結果から、半分以上の生徒が佐田町に残りたいと思っていることがわかります。そして、佐田町に残りたいと思っている生徒の理由は、このようになっています。こ

の中でも多かった理由は、「故郷だから」「佐田を残したい」「活性化させる」という理由でした。

一方で、佐田町に残りたくないと思っている生徒の理由はこのようになっています。この中でも多かった理由は「都会に出たい」「やりたい仕事がない」「不自由」という理由でした。

次に、佐田町を残していくために、何をすべきなのかについてです。結果はこのようになりました。この中でも多かった意見は、「ポスターでPRをする」「人を呼ぶ」「町民で盛り上げる」という意見でした。

次に、佐田町に貢献していくために、私たちにできることについてです。結果はこのようになりました。この中でも多かった意見は、「ボランティアを通しての交流をする」「地域の方を助ける」「アピールをする」という意見でした。

次に、佐田町の行事にどれくらい積極的に参加しているのかについてです。結果は全校生徒67人に対して、95%でした。この結果から、ほとんどの生徒が地域の行事に積極的に参加していることがわかります。

それでは、全校生徒はどのような行事に積極的に参加しているのでしょうか。結果はこのようになりました。「ごっこ祭り」「とんどさん」「夏祭り、秋祭り」「ラピタ祭り」「須佐神社祭」「公民館掃除」などでした。多くの生徒が楽しみながら、地域の方と交流することのできる行事に、積極的に参加していることがわかります。

最後に、佐田町の課題についてです。結果はこのようになりました。この中でも多かった意見は、「人口をふやす」「特徴的なものの想像」「少子高齢化」という意見でした。

これらのアンケート結果をまとめるとこのようになります。まず悪い面では、「人口減少」「少子高齢化」「交通の便が悪い」「特徴的なものがない」「行事が少ない」という結果になりました。一方でよい面では、「人が優しい」「自然が豊か」「助け合える」「佐田町にしかない行事がある」という結果になりました。

この結果から、よい面も悪い面も、アンケートを実施しなくても既に佐田町の課題となっていることが、たくさん挙げられていることがわかります。また、佐田中生の佐田町に対する関心や興味が、まだまだ足りていないこともわかります。そして人や見方によって、感じ方も違うこともわかります。

**藤井** それでは、私たちが考える、佐田を活性化させていくためにすべきことについてです。まず「ひと」では、少ないからこそ人を増やすための対策をしなければいけません。例えば企業を誘致したり、観光スポットをPRしたりして、佐田で働きたい、佐田町にはこんないいところがあるんだといった、佐田に興味を持ってもらう必要があります。

次に「もの」では、少ないからこそ人と人との関係を豊かにできるものをふやす必要があります。例えば地域の行事で地域の方と触れ合えるような機会をふやすことで、さらに地域の方との絆を強めることができます。



最後に「こと」では、少ないからこそ行事をPRしなければいけません。佐田町の行事をPRしないと、興味を持つ人がどんどん少なくなってしまいます。なのでもっと、佐田町の行事をPRしていくべきです。

そこで、私たちに出来ることを2つにまとめました。1つ目は「佐田町をより深く知る」です。アンケートの中で、都会に出たいと考えている人が多くいました。そのことから、都会に出たいと考えている人が、将来都会に出たときに、佐田について話すことがあれば、それが佐田町を知ってもらえる1つの機会になります。そのことを考えると、私たちが佐田町にある行事や文化を知るということは、佐田町をPRできる1つの手だてになります。なので私たちは、佐田をさらに深く知り、良さを発信していきます。

2つ目は「佐田町の行事にもっと積極的に参加する」です。佐田町の良さを知るためには、行事に積極的に参加し、地域の方と触れ合い、自分の体で体験する必要があります。そして私たちは、その体験を経験まで高め、経験を生かした取り組みや活動をしていきます。

私たちは1年生の時から「ひと」「もの」「こと」をより強く考える授業をしてきました。1年生のときには、地域の方や自然と触れ合い、地域に根差した学習をしてきました。神戸川環境調査では、佐田町の自然に触れ、地域の環境に関心を持ってました。福祉交流学习では、地域の方と触れ合うことで、地域の方の温かさを知りました。養護学校での学習では、人とのかかわり方を学びました。職業調べでは自分の将来について考え、30年後調べた職業が残っているのか考えました。

2年生のときには地域のことだけでなく、これからの時代を豊かに生き抜く上で大切なことを学びました。キャリア教育学習では、関西外国語大学の中嶋先生をお招きし、未来の生き方を学びました。保育実習では、窪田保育所の園児の方と交流し、地域に関心が持てました。小学生中学校体験では、自分たちで一から計画を立て、行動力を身につけました。情報モラル教育では、ネットとのかかわり方を学びました。

そして修学旅行では、京都で佐田町のことをPRしてきました。そのときは佐田町の朝日たたらや吉栗の里、須佐神社や八雲風穴のポスターやパンフレットをつくり、PRをしました。このように私たちは、出雲観光大使として、佐田町のことを知ってもらえるように活動しました。

外国人の方へのインタビューでは、イスラエルやアメリカ、ドイツなど多くの方にインタビューしました。質問の中で旅行の目的を聞いたところ、観光で来ておられる方が多く、佐田町もそのような方々を呼び込めるように、観光地や特徴的なものをふやしていくべきです。また、滞在期間を聞いたところ、2週間や3週間と長い期間で旅行されている方が多く、そのような方々に佐田町を知ってもらい、来てもらうにはどうしたらいいのかを考える必要があります。

そのほかにも、京都に訪れた理由を聞いたところ、寺院めぐりや日本が好きだから、という意見が多かったです。つまり外国人の方は、日本に興味や日本を知りたいという方が多い

ということです。なので佐田町も、ほかの場所にもっとPRし、観光客を呼び、さらなる発展につなげていくべきです。

この修学旅行では、76人の外国人の方にインタビューしました。質問の最後に、島根県のことを知っておられるのか聞いたところ、76人中1人という結果でした。やはり外国人の方には、島根県の知名度が低く、それと同様に、日本でも他県の人からの知名度も低いのが現状です。

このインタビューから、もっと佐田町のこと、出雲市のこと、島根県のことをPRしたいと感じました。また、外の世界に触れることで、改めて佐田のよさを知ることができました。

最後に、多くの人とかかわることで、人の温かさやおもてなしの大切さを学びました。小さな活動ですが、このような機会を通して、多くの方に佐田町のことをPRし、貢献することができました。これからも佐田中生として、佐田を知り、佐田を発展できるように貢献していきます。

最初に話しましたが、佐田町発展には「ひと」「もの」「こと」が大切です。それと同じく私たちは、MVPというのを大切に生活しています。Mはmission、使命です。Vはvision、見通す力です。Pはpassion、情熱です。つまり使命を持ち、先を見通し、何事にも情熱を持って取り組むことで、ものごとの成功や発展につながります。これからは、佐田町を発展できるように、佐田中生として貢献していきます。これで私たちが考える佐田町についての発表を終わります。



**三島(貴)** 発表ありがとうございました。そのまま、藤井さん小山さんはちょっと残っていただきまして。突然ではございますが、きょう会場のほうにいらっしゃっています、佐田中学校児玉校長先生に一言、お2人に何かお言葉をいただけたらなと思いますので、よろしく願いいたします。

**児玉** 失礼します。佐田中学校の校長の児玉弘之と申します。三島さんから突然の指名で、どぎまぎしておりますけれども。実はNPO法人スサノオの風の石橋理事長さんから、今度佐田まちづくりフォーラムをするに当たって、ぜひ中学生に佐田のまちづくりについて提言をお願いしたいというお話がございました。

佐田中学校は、私は学校経営方針で、自立、共生、そして貢献という3つの柱を子供たちに、それから教職員のほうに話をしております、人や地域、故郷佐田に貢献できる生徒を育てたいという思いを強く持っております。またとない機会をいただいたなということから、生徒会の執行部の子供たちに投げかけをしまして、子供たちが全校アンケートをとり、それを集計し、分析をして今日の発表の運びになったということです。

内容は中学生目線で佐田のまちづくりについて、1つの提言をさせていただいたという、拙い発表ではございましたが、きょうの発表をきっかけに何かしら反響があって、またその反響、うねりが子供たちにいろいろな形で返ってくることを、期待しておるところでございます。

補足にはなりませんけれども、子供たちの精いっぱいのおいの詰まった、そして故郷佐田が好きだという思いが伝わったら、大変うれしく思います。大変貴重な機会を与えていただきまして、ありがとうございました。

**三島（貴）** 校長先生、突然のお願いありがとうございました。そうしましたら、皆様もう一度2人に盛大な拍手をお願いいたします。ありがとうございました。

ここで10分間の休憩をとらせていただきます。次の開始時刻がこちらの時計で14時50分から、またこちらのほうで開始をさせていただきたいと思います。この後もパネルディスカッションで、楽しいというかおもしろい話が聞けるとお思いますので、そのまま皆様どうぞお戻りになってお聞きいただければと思います。

(10分休憩)

## パネルディスカッション

### 佐田の将来像を描くための1歩を踏み出すために

出雲市伊野地区自治協会	会長	多久和祥司
安来市えーひだカンパニー(株)	取締役	野尻ちさと
佐田自治協会「小さな拠点づくり部会」	部長	福谷 一真
佐田自治協会「小さな拠点づくり部会」	副部長	神田 千俊
窪田ミライ会議		伊藤 恵
(進行) 島根県中山間地域研究センター	研究員	吉田 翔
(講評) 島根大学教育学部	教授	作野 広和

**三島（貴）** 皆様、大変お待たせいたしました。ホールがちょっと寒いようでして、私の年齢と同じ年のホールになりますので、ちょっと老朽化が進んでおります。じきに暖かくなってくると思いますので、しばしご勘弁を。大丈夫ですので、済みませんでした。

そうしましたら第2部、今から「佐田の将来像を描く1歩を踏み出すために」といたしまして、パネルディスカッションのほうを行わせていただきたいと思います。ここからの進行ですが、島根県中山間地域研究センター研究員の吉田翔さんに、三島からかわりたいと思いますので。それでは吉田さん、よろしく願いいたします。

**吉田** ただいまご紹介にあずかりました、中山間地域研究センターの吉田です。座って失礼いたします。



ここからの時間はパネルディスカッションという形なのですが、具体的に申しますと、最初3名の方にスライドを用いて、地域の事例や現在の状況をお話いただきまして、その後の時間、壇上に上がっているメンバーでディスカッションをさせていただきたいと思えます。最後に作野先生に総評をいただくという流れを考えております。短い時間ですが、どうぞよろしく

お願いします。

最初に、本日壇上に上がってくださった皆様の自己紹介をお願いしたいと思います。それでは、福谷さんからお願いしてもよろしいですか。

**福谷** 皆様、本日はお越しいただきまして、まことにありがとうございます。佐田自治協会の小さな拠点づくり部会の会長を務めております、福谷と申します。よろしく願いいたします。

**野尻** 皆さんこんにちは。安来市からやってきました、えーひだカンパニー株式会社で取締役をさせていただいています、野尻ちさとといいます。よろしくお願いします。

**多久和** こんにちは。出雲市の伊野地区というところからやってまいりました、多久和と申します。伊野地区の自治協会会長をしております。きょうはよろしく願いいたします。

**伊藤** 失礼します。私は名簿にあります、窪田ミライ会議のメンバーとして、今日ここへ立たせていただきました。伊藤と申します。よろしくお願いします。

簡単に、ミライ会議のことも一緒に説明してねと言われたのですけれども、窪田地区に限らないのですが、町外の方なんかも入っていらっしゃいますが、20代から40代くらいの、若い人の意見交換の場でありまして。

きっかけは、若い人に行ったアンケート調査、窪田コミセンが行ったのですけれども、そのアンケート調査の中で、若い人たちの交流の場があったらいいなというお声をたくさんいただきました。そこで若い人たちの交流が始まって。今は任意のグループとして、私も個人として参加しております、多いときは月1回ぐらい、皆さんで集まって意見交換をしたり、そのほか町内でゴザ走り大会など、そういうイベントの企画なんかもやったりしております。そういう団体です。

今日は発表の皆様に対して、こういうことを聞きたいなという、皆さんの代弁ができるかどうか、ちょっと分かりませんが、そういった立場で出させていただいております。寒さと緊張で震えておりますが、よろしくお願いします。

**神田** 私は、今小さな拠点づくり部会というのが佐田自治協会で作られておりますけれども、その部員の1人として出ております。これは13振興協議会ありまして、その中で部員は4名ほど出かけておりますけれども、その中の1名ということで、きょうは部長さんと一緒に出ております。よろしくお願いします。

**作野** 先ほど拙い講演をさせていただきました、島根大学教育学部の作野と申します。この佐田につきましては、本学着任しました 1997、8 年ごろからずっとおつき合いをさせていただいております。本日もどうぞよろしくお願いいたします。

**吉田** それでは早速、出雲市の伊野地区の多久和さんから発表をお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

**多久和** 伊野地区というのは、出雲市の一番東の端っこにあります。私の家から見える山は、もう松江市です。ちょうど境目のところにある、人口が 1,260 人ほどの小さな地域です。宍道湖から日本海まで抜ける、細長い地域になっています。



早速です。伊野のまちづくりの場合ということで、流れだけを簡単にご説明をしたいと思います。やはり、課題は山ほどあるわけです。ですから、できるところから取り組む。当然そうですね。それからやがて、少人数だけの取り組みではいけないから、もうちょっと危機や課題についてみんなに分かってもらおう、危機と課題を共有しようというふうな動きが出てきます。

それから、やはり 10 年とか 20 年という長期的な展望に立った取り組みが必要ではないかというふうな声が上がってくるようになりました。こういう順番に沿って紹介をしていきます。

これは、2012 年に出雲市が学校の大規模な統合、再編計画を打ち出しました。私のところの伊野小学校も、再編の対象になりました。伊野小学校と、隣の東小学校、もう 1 つ隣の檜山小学校、3 校を一緒にという提案が出されました。

2 年半にわたって、地元で熱い議論を展開してきましたけれども、2015 年の 5 月になって、学校は残すという結論に至りました。残しても残さなくても、どのみち色々なことを後々言われるのは分かっている、非常に苦渋の決断でした。

教育問題を何とかしないとイケないということで、これは伊野バージョンとあって、作野先生にもお世話になりましたが、島根大学の教育学部の学生と地元の者として、伊野の自然を舞台に子どもの遊びをつくろうという取り組みです。田んぼで泥んこ運動会をしたり、これは去年の夏、赤名小学校の子供たちも参加して、海でいかだレースをしたり、こんな活動です。

それから、佐田も同じでしょうけれども、高齢農業者の皆さんが、これからどんどん離農されていく。元気がなくなる、耕作放棄地がどんどん増えていく。そういう状況の中で、何か元気の出ることをしないとということで始まったのが、「伊野いち」という産地直売所です。年に 2 回開催します。毎回 300 人から 400 人くらいのお客様がお見えになります。「伊

野いち」ファンがどんどんふえてきています。「伊野いち」ファン交流会などもやったりして、消費者と生産者の皆さんの交流の機会をつくったりもしています。

「伊野いち」の人気の秘密は、勿論1つ目は新鮮で安い食材があるということ。しかも宍道湖から日本海まで、海のもの、山のもの、里山のもの、いっぱいあるわけです。それからこのおもてなしコーナーで、これは無料で伊野の美味しいものを召し上がっていく、新米のおにぎりだったりしじみ汁だったりします。これが非常に人気で、交流の場を作る、交流ができるというのが2つ目の大きな魅力になっています。

3つ目の魅力は、小学生が参加するということです。小学生たちが3年ほど前に、「伊野いち」のCMソングを作ってくれました。これは開店前に伊野小学校の子供たちが、CMソングを皆さんの前で披露しているところなのです。この子供たちが買い物のお手伝いをしたり、おもてなしコーナーの配膳をしたりとか、いろいろ活躍するので、伊野小学校の子供たちが参加しているというのが、お客様にとっては非常に大きな魅力になっています。

それから、教育関係でいいますと、左側が伊野児童館といいます。島根県下には3館しかありません。無料で使える児童館です。放課後子供たちが遊びに来て、宿題をしたりして、バスを待ったり保護者の迎えを待ったりする場所になっています。

あと夏休みとか冬休みの間、朝の8時から夕方の5時ぐらいまで預かってもらえないだろうかという声上がるようになりましたので、出雲市の放課後子ども教室事業を活用して、地元のボランティアの皆さんによって、夕方の5時まで子供たちを預かるようにしました。これもそうですね。

ただ、長期休業中も平日も、午後の5時まで子供たちを預かるのですけれども、何とか6時とか6時半まで預かってもらえないだろうかという保護者の皆さんの要望が上がるようになりました。ついこの間、検討委員会を開きまして、児童館の開館時間を平日は午後の6時までにする、夏休み等については夕方の3時から6時までの間は放課後子ども教室、いのっ子教室といいますが、その事業で地元のボランティアが子供たちの面倒を見ましょうということになりました。無料です。

放課後児童クラブだと月に7,000円とか8,000円とか要りますけれども、伊野の場合は無料で夕方の6時まで、平日も長期休業中も子供を預かるという体制をつくることにしました。これはふるさとカルタを子供たちがつくったやつです。

それから、これは国際ワークキャンプといいまして、海外の青年たち、それから日本の青年たちを伊野に呼びます。そして地域交流をします。特に子供たちとの交流を重視しています。これも、チェコの女性から切り紙を教わっているところです。

国際ワークキャンプ、大体10人から15人ぐらいやってくるのです。それで1週間ぐらい伊野に滞在します。毎年身をちょっとずつ変えています。去年は家事ボランティア2時間を、午前午後と2回組み込みました。これ、私の家の墓なのです。うちへやってきてもらって、墓掃除を手伝ってもらうのです。何でもいいのですけれども、民家に入って行って、

そこでできるお手伝いをするというので、地元の人たちとの交流を深めるというような取り組みです。

それから森林整備もやってもらいます。それから、山はどこもお荷物ですよ。私のところも山があるのですが、欲しい人がいたら差上げます。その山がお荷物なので、山を何とかできないかということで、山を教育の森に再生しようということで、県の事業も使って、学校の近くの「りんご山」という山の整備をしました。

そのときに、トレイルランをやってみようではないかという話を持ちかけたのですが、地区内のアスリートたちがすごく頑張って、山道を走るマラソンですよ、こういったところですよ。これ、左側は視覚障害の方が先頭を走ってらっしゃいますけれども、こういった方たちも参加して下さるようになって、年々数がふえています。

それから走り終わって、ゴールの伊野小学校に戻ってくると、今度は「ちょんぼし伊野いち」という軽トラ市が待っています。参加したランナーの皆さんやそのご家族の皆さんが、買い物できるようになっています。

最初の数年間の大きな取り組みは、伊野小学校の学校づくり、魅力化と、地域のまちづくりをつなげる。そして関係人口をつなげるということがメインの取り組みになっていました。

特に伊野小学校との連携。伊野小学校を残すことにはしたのです。けれども、これから子供の数がふえていくという保証はありません。いつ、小学校はやはり統合したほうがいいのではないかという声が出てこないとも限りません。伊野小学校の先生たちに、とにかく困っていることがあったら何でも言ってください、できることは何でもします、学校を残してよかったなとみんなが思えるような学校を、みんなで作っていきましょうというふうに呼びかけました。

ですから、例えばプールの掃除に困っているという話を聞けば、プール掃除をお手伝いします。それから校庭の草刈りもお手伝いします。修学旅行の経費が、少人数なゆえに割高になる。それも地域で補助しましょうということで、地域と学校の連携会議を開いて、学校の困りごとをしっかりと聞くようにしています。学校に向けての私たちの要望も、聞いてもらうようにしています。

これはファースト・レスポnderといまして、うちは消防署から遠いのです。ですから、消防署から救急車が到着するのに15分とか20分とかかかる地域があります。手遅れにならないように、ファースト・レスポnderという組織をつくりました。全国で5例しかありません。

緊急事案が発生すると、隊員の皆さんに消防署からメールが届きます。私たちは駆けつけて行って、そこで心肺蘇生をしたり、救急車の誘導をしたりする。年間に2回ぐらいの出動事案があります。

それから、私のところは島根原発から10kmです。原子力災害というのが非常に大きな関心事になっています。避難先は大社町の荒木地区ですので、荒木地区との連携を深めるとい

うことで、3月の11日、荒木地区で行われるメモリアル・ウォークに毎年参加をしています。

こういった取り組みを重ねているうちに、やはり「危機」と「課題」を共有しないとイケないのではないかという声が、たくさん上がってくるようになりました。それで、発信が大事だということで、自治協会のホームページを立ち上げました。またごらんください。

それから、ふるさと会員という仕組みをつくりました。伊野出身で、外に出ていった方、その方たちとのつながりは薄くなっていますよね。出ていった方たち、外にお住まいの方たちに、伊野のことをわかっていただいて、助けてもらおうということでふるさと会員、最初の年は1口 5,000 円でご寄付をいただく。それでいろいろ提案もいただくというふうな仕組みをつくり上げました。今は1口 1,000 円です。最初の年は返礼品も差し上げていました。今も 5,000 円ご寄付なさると、返礼品を差し上げるようにしています。

いただいたお金は、伊野小学校の修学旅行経費の保護だとか、卒業アルバムの代金補助だとか、ふるさと会員の交流事業だとか、まちづくり事業助成だとかに使わせていただいています。

小学生たちは、小学校6年生の国語の教科書に「まちの幸福論」という文章が載っています。著者はこの右側に出ている若い方、著名な方ですが、この方を毎年招いて小学生たちは勉強をします。そして、地域の皆さんの前で発表会をします。

大人も負けてはおられないということで、伊野の将来を考えるフォーラムを、おとしからかなり頻繁に開催するようになりました。そして、地域の皆さんに、一体私たちが何に取り組んでいるのか、伊野の課題が何なのかということを見えるように、やさしくわかってもらうために、動画をつくろうという話になりました。15 分間の番組を作成しました。これはその試写会なのです。

ここのあたりから大きく伊野が動いていくのですけれども、その動画を持って、各集落全部回りました。自治協会の役員が手分けをして、持って回って、これを見ていただいて、今伊野の課題について、皆さんどういうふうにお考えですか、どうしたらいいでしょうということを問いかけました。

普段、ここもそうかも分かりませんが、月に1回常会という会議を開くのですけれども、大体意見なんか出ないわけです。多分何も意見は出ないだろうなというふうに思っていましたけれども、いっぱい出ました。本当に、「草刈り、年寄りはやよう出らん」とか、「町内の役を誰が引き受けるんだ」と。「こんな町に、若い者に帰ってこいとはよう言わん」とか、いっぱい不満が噴出しました。積極的な提言もたくさんありました。

そういう声を全体のものにしようということで、おとし「まちづくりフォーラム」を3回開催しました。去年も3回開催しました。そして今年度から、去年の4月から、長期的総合的な取り組みが必要だということで、ビジョンをつくることになりました。「伊野の将来ビジョンをつくる戦略会議」、ちょっと大げさな名前ですけれども、戦略会議というのをつくりました。メンバーは80人近いです。



部会が、教育部会、農業・水産部会、交流部会、福祉・医療部会、安全・安心部会、情報部会、そして学生グループ。伊野に学生が5人います。その5人皆が学生グループというグループをつくって、若者目線から伊野の将来を考えてもらっています。そして、今いろいろなビジョンができ上がってきています。今月末には完成する予定です。

これまでの取り組みを振り返って、ちょっと教訓めいたものを言うとしたら、住民の皆さんの違いを持ち味に読みかえて、その持ち味に出番を準備して差し上げる、ということが大事だったのではないかと思います。たった人口1,200人ほどのところで、すごい力持ちがいるわけでも何でもないので。

でもこのおばあちゃんは、チマキづくりが得意なのです。これ、カヤで編んでいるのですが、あの中にチマキが入っているのです。どんぐり系の葉っぱでチマキの団子をくるんで、それをさらにあのカヤで編みこむのです。それを羽釜の中に入れて湯がいて、きなこをつけて食べるのですけれども、もう絶えていたのですけれども、これを復活させることに成功しました。こういうおばあちゃんたちが、待ってましたという感じで出てくださいます。

それからさっきのトレイルランなんかも、これはエイドステーションなのですが、頼んだわけでも何でもないのでけれども、自分たちも楽しもうということで、沿道の皆さんが勝手にテントを立てて、果物や飲み物を準備して、ランナーを応援してくださる。これもそれぞれの皆さんが、できるところでやっていただけるまちづくり参加だろうな、と思います。

それから国際ワークキャンプのときに、外国人のキャンパーたちに浴衣を着せてあげたいのだけれどもどうか、というお話が舞い込んできて、どうぞどうぞということで、こういうふうな着つけをしてくださいました。というふうに、それぞれ皆さんの持ち味を生かすというか、出番を準備して差し上げることが、とても大事ではないかと思います。

それから、ちょっと難しく言いますが、「意味化」と書きましたが、自分のやっている小さなことの、大きな価値を発見するということ。例えば小学生たちが下校するときに、見守りをしてくれるおばあちゃんたちが何人かいらっしゃるのです。雨の日も風の日も雪の日も、本当によくもと思うほど熱心に、心配してやってくださるのですが、そういう小さなことの、とても大きな価値ですよ。それをやはり、みんなで発見していくということが大事ではないかな、と思います。

そうやって自分がやっている小さなことを、地域の皆さんが認めてくださるということで、つながっていくでしょうし、自分の人生の物語を描いていくことができるのではないかなというふうに思います。

例えば、「小学生の卒業式に参加するのもまちづくりだわ！ 私の卒業式も近いけど」、つまり葬式ですが、というのは、小学校の卒業式は人数が少ないのです。ですから小学生にかかわって、いろいろなボランティアをした人たちも、皆さんみんな出ましょうよということ、3年ぐらい前から呼びかけていますので、それぐらいだったらというので、卒業式に出るのも、これもまちづくりという感じです。

時間がもうないですね。「たまったエネルギーで次の展開を」と書きました。伊野ビジョン・ムービーという動画を作成しました。集落ごとのまちづくりトークをしました。いっぱい声が上がりました。それをまちづくりフォーラムにつなげます。そしてそれが、伊野ビジョンをつくろうという動きにつながっていくということで、たまっているエネルギーをどんどん大きくしていく、消さないでいくということは、とても大事だろうと思います。

それから、「話せる仲間づくり」というので、うちの場合親子参加とか夫婦参加だとか、3世代参加がだんだんふえてきました。これはとても大きな力に今後なっていくだろうと思っています。

ただ、不安なことをちょっと言います。一番心配しているのは、いろいろなことをやっているのですが、人口減少や少子高齢化のスピードについていけるかどうかということが、とても心配です。2030年には1,000人の村になります。20年後には800人を切るという状況なのです。こういう中で、本当にまちづくりが追いついていくのだろうか。しかも人口構成も、30代、40代が細っていくのです。さらに、自治協会の加入世帯数がどんどん減っていきます。加入率はほぼ90数%なのですが、それでもこんな状況で減っていくのです。

そうすると、自治協会の会費収入も、こんなふうにどんどん減っていくわけです。さらに、新しい組織のあり方ですね。これは、交通安全と防犯に関する地域の市区なのです。伊野地区子どもを守る会から始まって、いっぱい組織がありますよね。行政はというと、両サイドなのですが、出雲市の防犯協会があったり、市の市民活動支援課だったり、交通政策課だったり。

恐らく行政のほうは、その時代時代の要請に応じて、各地域にこういう組織をつくりなさい、こういう要綱でというふうなことを言ってきたのだと思います。それが積もり積もって、こんなになっているわけです。これが地域なのです。受ける地域は本当にわずかな、小さな小さな力しかないところ。そこに、交通安全や防犯だけでも、こんなにたくさんの組織をつくるように指示されてきているわけです。ですから、地域の運営組織を変えるということと、行政の組織を改革することは、多分一体だろうと思うので、この点は行政のほうに特に要請をしておきたい、というふうに思います。時間が来ましたよね。では終わらせていただきます。

**吉田** 多久和さん、ありがとうございます。聞きたいこととかいろいろ、この段階で出ていると思うのですが、最初に発表者の方に全員発表していただいてから、ディスカッションとさせていただきたいと思います。

続きまして、安来市のえーひだカンパニー取締役の野尻ちさとさんから、発表をお願いします。

**野尻** えーひだカンパニー株式会社で取締役をさせていただいています、野尻ちさとといいます。よろしくお願いします。1人安来市なので、ちょっとアウェイではないですけども、ひとりぼっちな感じがしますが。安来市の比田地区というのは、さすがに皆さん全員は知らないと思うのですけれども、安来市の中でも一番南にあるのが比田地区になり



ます。大体人口が今 1,023 人で、世帯数が 376。安来市の中心というと、やはりこのあたりになるのですけれども、そこから大体 35 km 離れていて、標高がやはり、ここからぐっと登っていくので、300mあります。

比田地区といっても、行政区としては3つありまして、西比田、東比田、梶福留という3地区になっていて、中学校はありません。小学校は1つだけあります。公民館、交流センターが2つあります。商店は1つだけあるというような地区になっています。

知られている方もいるかもしれないのですけれども、全国 1,200 ある金屋子神社の総本山が比田地区にあたり、無形文化財である比田踊りというのが残っている、こういう伝統的な部分が残っている地域であったりします。あと冬はやはり 4、50 cm、昔から比べると少なくなったといってもこれぐらい積もっていますし、やはりこういう段々畑が多い地域になっています。

ひだカンパニー株式会社というのも、比田の地域活性化のプロジェクトが実現していくための組織となっていて、そもそも地域活性化のプロジェクトが動き出したきっかけなのですけれども、このグラフを見ていただくとわかるように、いろいろな今までの発表にもありましたように、比田地区もやはり人口減少、あとは耕作放棄地の増加、あとは後継者がいないという問題があって、このままでいくと人口が、20年後ぐらいには今の半数を切って500人になってしまう、高齢化率もぐっと上がっていくような現状もわかりました。あとは、比田にある小学校も、今36人、40人ぐらいいるのですけれども、その子供たちの数ももう10人を切ってしまうのではないかと、というようなことも明らかになりました。

そんな比田地区を、やはり皆さん誇りに思っているし、地域を未来につなげていきたいという思いを持っていました。まずは将来の目指すべき姿を、住民一体で考える地域ビジョンづくりというのを考えられました。発案されたのは、この地域にも住まれていて、や市役所にもお勤めの30代の男性の方なのですけれども、その方が、そのときに70代の方で、この地区のリーダー的な存在であった方に声をかけて、その人と一緒にプロジェクトチームを結成します。

どういう人を集めたかということなのですけれども、役職にとらわれずに地域を引っ張る人たちに声がけということで、自治会長さんとか何かの会長をされているという、そういう役職には決してとらわれずに、普通のサラリーマンであっても農家さんであっても、普通

の主婦の方であっても、普段から地域の活動に積極的に参加されている方とかそういった方で、地域への思いがある方。そういう内面的な部分も見て、プロジェクトチームとして結成されました。

それで、平成27年なので、今から6年前の6月に、いきいき比田の里活性化プロジェクトというのをスタートさせます。やはり、比田の地域の人たちだけでは、プロジェクトといってもなかなか、地域ビジョンをつくるということもすごく大変な作業が多いので、外部人材の受け入れということで、地域おこし協力隊の受け入れをされます。それで出てくるのが私なのですが、ちょっと旧姓のままになっていますが、これが私です。京都府のほうから私も、地域おこし協力隊として移住してきました。ほかにも、大阪から農業がしたいということで男の子や、その1年後には女性の方が、また農業を中山間地域でしたいということで移住してきました。

実際のプロジェクトの取り組みなのですが、大体1年ぐらいかけて地域ビジョンをつくりました。ここから要点をお話しますが、まずアンケート調査を比田地区も行いまして、全世帯、中学生以上が対象で、目的としては現状把握、あとは地域の人たちがどういう意向を持っているかということの調査をするべく行いました。後継者がいますかとか、通学、通勤、通院はどこに行っていて、どんな交通手段でされていますかとか、そういったことを質問しました。

進め方ですが、まず自治会長協議会というのがあります。そこに出向きまして、そこで自治会長さんに、地域ビジョンをつくるべく、まずはアンケートをとりたいのということの説明をもらって、ご協力お願いしますということをお願いしました。実際配布する段階になったら、各自治会長さんのお宅まで出向いて、アンケートを配付して、あらためて説明するというような流れでやりました。

そういった流れで、自治会長さんのご協力もありまして、世帯主用に配った、各世帯に1つずつの分が、回答率86%。中学生以上の皆さんに配った分が90%と、高い回答率を得ることができました。

あとは、先進地の視察にも行きまして、兵庫県の姫路市にある農業生産法人の、「夢前夢工房」さんの視察や、あとは地域ビジョンづくりを先進的にされている、東広島市の共和の郷・おださんに行きました。こういった先進地視察に行くことによって、やはりプロジェクトチームのメンバーも、よりイメージを具体化することができて、意識が向上したのではないかなというふうに思っています。

あとは世代別のワークショップをさせていただきました。小学生から中高生、2、30代、4、50代、60代以上の5チームに分けて行いました。実際の様子ですが、これは小学生ですね。ほぼ全員が集まりました。というのも、小学校がすごく協力的で、授業の一環としてこのワークショップを開いてくれました。なおかつ先生たちが、もう説明から進行までサポートしていただいて、そのおかげで子供たちのアイデアを存分に引き出すことができました。

子供たちもすごく生き生きとして、いろいろなアイデア、意見を出してくれて盛り上がったのですけれども、それ以上にやはり大人たちが、子供たちが頑張っって意見を絞りに出して、悩んで考えていく、その姿に感動して、やはり大人たちももっと、子供たち以上に頑張らないといけないなということを感じました。あと中高生も、部活終わりのお疲れのときだったのですけれども 10 名ぐらい、対象人数の半分ぐらいが集まったり、あと大人たちも、大体 30 名前後集まって、話をしてくれました。

子供たちに関しては、もう直接話して、この日にやるので来てくださいということで交渉したのですけれども、大人たちに関しては、やはりここも自治会長さんに協力していただいて、大体 2 人ずつこのワークショップに出してくださいということでお願いしました。一番心配だったのが 2、30 代だったのですけれども、託児をその日行ったということもあって、ご夫婦で参加される方がいらっしやったので、良かったなというふうに思っています。

世代別のワークショップではいろいろなアイデアが出たのですけれども、さらに具体的なアイデアにして、地域ビジョンとしてつくっていきたいということで、全体ワークショップというのをその年の 12 月に行いました。

小学生以下の子供たちには、将来比田がこうなったらいいなという絵を描いてもらって、中学生以上にはワールドカフェ方式といって、席を移動しながら、話す人を変えながら行うワークショップに参加してもらいました。

こちらも実際の様子なのですけれども、これは小学校の体育館を借りて行いました。やはり話し合いが続くと、ちょっとどうしても堅苦しい雰囲気になってしまって、皆さんが自由に意見とかを交換できないのではないかなということもあったので、振る舞いとか、地域のお母さんたちに豚汁とかおにぎりを振る舞ってもらったりとか、あと比田の野菜とかお花を売る販売ブースを設けたり、そういうお祭りのような楽しい雰囲気というのを心がけました。

あと、このワークショップの前に講演会をしまして、その影響もあって、積極的な姿勢が見受けられたので、すごくいい機会になったなと思っています。

気になる参加者なのですけれども、約 120 人。比田の地区の 10 分の 1 以上の人数が集まってくれました。

こうして、アンケートから世代別のワークショップ、この全体のワークショップを通して出てきたアイデアの総数というのが、1,469 個も出てきました。これらのアイデアをプロジェクトメンバーで、このアイデアは早くやる必要があるとか、このアイデアをすると地域にどれくらい影響があるかという、いろいろな項目で点数をつけて、それで高い順から取り上げていって、比田の地域ビジョンとして完成させました。

その地域ビジョンをつくったときにテーマにしていたのが、比田を愛し、行動し、誇りに思える地域にということで、地域の中にいる人はもちろんですけれども、地域の外に出た人も、いつか比田に戻りたい、しばらく帰れないとしても比田を愛してほしいということで、外にいても地域に誇りを持ってほしいという意味を込めて、このテーマにしました。

地域ビジョン、実際にできた分がこの分です、88項目にまとめました。やはり地域の皆さんは、いろいろなお仕事をされていたり、いろいろな立場の方にアンケート、意見を頂戴したということもあって、福祉のアイデアが載っているような生活環境の部分とか、農業とか商業のアイデアが載っている産業振興、あとは地域の魅力の発信にかかわるような部分とか、定住、移住の促進。こういったばらけた4つの柱になって、88の戦略プランとして構成されます。

そして、これからが大変だということで、地域ビジョンができて良かったになってしまうと、絵に描いた餅になってしまうので、これを実現させていくということが大事なのですが、この地域ビジョンができた年の8月、夏ごろに、まず任意組織でえーひだカンパニーというのを設立させました。

先ほどちょっと説明できていなかったのですが、そのプロジェクトチームは20代から70代まで幅広い方が、大体20名位いらっちゃって、どちらかというと60代、70代の方の割合のほうが多かったです。でも、これから実現させていくには、やはりこれからの10年20年を考えていくためには、今の30代40代の方に中心になってほしいということで、もう1回メンバーを、40代の方中心に集め直して、そのときは73名。比田の地域に住んでいる方73名で、えーひだカンパニーを設立させました。

ただ、比田地区の場合ですけれども、これまで比田地区の任意組織というのは、中心人物が脱退したりとか、行政からの支援が縮小すると、弱体化するケースが多かったので、持続可能な組織にならないといけないということで、平成29年の3月に、えーひだカンパニー株式会社として法人化しました。

よく聞かれるのですが、何で会社化をしたかということで、3つあります。1つは人が変わっても継続する仕組み。2つ目は、私たちが思うにはですけれども、社会的信用力が高くなるのではないかなということ。あと3つ目は責任。社会的責任、株主への責任ということで、重い意味の責任もありますけれども、会社にしたからにはきっちりいろいろな事業をこなしていかないとけないという、前向きな意味での責任だと思っています。この3つです。

会社の形態の中でもいろいろありますけれども、その中で株式会社を選択した理由は、1つは事業の制約を受けにくいのではないかとということがありました。実際になってみると、受けることが多いのですが、最初はそう思っていました。2番目は、株式出資という形で、地域づくりに参加してもらえるとということで、地域の外に出られた方も、プロジェクトを始めているときから、いろいろな応援の声をいただいていた、そういう方たちにも参加してもらいやすいのではないかとということがありました。

こちらが会社概要なのですが、あとこれが組織図になっていて、社長はこの比田の地区に唯一ある商店、興南堂という商店がありまして、スーパー、食堂、仕出しをやっている、すごく大変なところなのですが、そこの社長がえーひだカンパニーの社長もされています。今53歳ですね。

今、えーひだカンパニーは8つの部で成り立っています。総務部、会社の頭脳的な部分、あと生活環境部、福祉関係ですね。比田米プロジェクト部、ちょっと名前だけでは何をしているのか、ちょっとわかりにくいのですけれども、農業関係の部です。あと魅力発信の地域魅力部、定住移住促進の定住促進部。去年初めて新設したのが販売管理部ということで、いろいろな農産物や加工品を外に売っていかないといけないということで、こういうのを新設しました。

えーひだカンパニーは、私含め取締役が5人います。最初は1人1万円の5万円から始めたのですけれども、2017年の10月に増資して、337.2万円となりました。それで、今ちょっと人数もふえているので変わっていると思うのですけれども、平均年齢が大体46歳ぐらいだということです。

えーひだカンパニーの一番の特徴と言えるのが、経営理念だと思っています。「自治機能と生産機能の発揮による“地域ビジョンの実現と「えーひだ」の創造」としてはいますが、地域でまちづくりを行う機能が自治機能、地域の持続には大切ですが、これ単独ではなかなか財源を生み出すことが難しいというのが自治機能です。

一方、自治機能を発揮するために必要な財源を自立的に生み出すことができる機能として、生産機能を一方で挙げています。この2つの機能が、自転車の両輪のような形でお互い作用し合っていくことで、下に書いていますけれども自立した地域づくりを計画的に行える仕組みであるとか、ボランティアばかりに頼らない仕組みというのが可能なのではないかなというふうに思っています。

ちょっと時間がないのですけれども、えーひだカンパニーができるまでは、地域ビジョンをつくりましたけれども、その進め方のポイントとしては、まずアンケート調査をして現状を把握して、ワークショップをして皆で理想を語り合って、理想と現状を見て課題を明らかにするというのが、ワークショップでありました。それと同時に、理想を語ることでビジョンというものが大体見えてくるわけですが、その課題を解決するために、まずチームづくりを行って、実際事業計画を練ってみて、実践してみようという流れの中で、人材育成というのも並行して行っていくということが、比田地区での地域づくりの進め方のポイントです。

あとは、ビジョンづくりのポイントとしては、チームづくりが大切。宛て職よりもやる気のある若手を優先していくということの心がけや、実働する人の確保ということで地域おこし協力隊や集落支援員の方、公民館の職員、地元の行政職員の方をメンバーに取り入れる。

あとは、ビジョンをつくる過程でつながりを強くしていく。できるだけ多くの住民の意見を取り入れる。ビジョンはつくって終わりではなくスタートという認識を持つ、ということがポイントです。

チームづくりのポイントとしたのは、リーダーは口を出さないが責任はとってやるという人が、リーダーとしてふさわしいというか、実際、えーひだカンパニーの社長もこういう方です。マネージャーは組織運営ができる人、というのは必ず必要。あとはプレイヤーとし

て行動力がある人。あと女性や若者、そういった方たちがプレイヤーとして入ってくれるといいチームになるというふうに考えています。

ということで、時間が来たのですけれども。これ以上の、えーひだカンパニーで今どういうことをしているかが知りたいなと思われた方は、ぜひ比田地区においでいただくか、視察や講演も絶賛受付中ですので、そちらもよかったらよろしくをお願いします。

ということで、地域ビジョンをつくっていろいろな活動をしてきて、実際すごく大変にはなってきたのですけれども、全然やはり後悔はしていません。ちょっとでも前に踏み出したことで、少しずつ誇りを持ってくださる方もふえていますし、そういう意味ではやってよかったなというふうに思っています。以上です。ご清聴ありがとうございました。

**吉田** 野尻さん、ありがとうございました。今ビジョンをつくっている伊野地区と、続いてビジョンをつくって終わりではなくて、これをスタートとして捉えて動いていらっしゃるえーひだカンパニーの動きを聞かせていただいたのですが、続きましては地元の佐田自治協会小さな拠点づくり部の部長の福谷さんから、現在の動きをお話いただきたいと思います。それではお願いします。

**福谷** 佐田自治協会小さな拠点づくり部会の事例報告、事例といいますかこれまでの活動報告になりますが、早速始めていきたいと思います。お二方に比べて、かなり内容が薄いので、どうぞ気楽にお聞きください。



まず、この小さな拠点づくり部会の設立の経緯についてお話をいたします。第1部の作野先生の講演でもありましたとおり、佐田町における人口減少と高齢化の問題というのは、別に今に始まったことではなくて、随分昔から問題視されておりました。

90年代から振興協議会を初めとした佐田の自治組織、運営組織というのがつくられて、この問題に対していろいろ活動があったわけなのです。ただ、だからといって今全部解決していますかという、全然そうではなくて、逆に深刻化しているのが現状ではないかなと思っています。

自治会の運営を初めとして、各地域のお祭りとかイベント事、防災活動について、本当に今のままで大丈夫ですか、続けられそうですかということで、開会の挨拶で理事長からあったように、「タニンゴト」ではなくて「ジブンゴト」として考えていまいしょうということで、佐田自治協会の専門部会、つまりこういった佐田町の問題に対して、専門的に考える組織をつくらうということで、小さな拠点づくり部会というものが、2018年の8月に設立されました。なお、中間支援組織として、この部会の事務局をスサノオの風様が担当してきております。

これまでの活動、拠点部会をつくって今まで何をしていたかということなのですけれども。まずは佐田町の課題とか困りごとについて把握をしてみましよう、全体を捉えてみましようということで、部会が確か2018年の9月に初めて催されました。



佐田町には 13 地区、窪田と須佐と、全部で 13 地区あるのですけれども、なるべくその 13 地区から部会員を募って話し合いをしたのですけれども、ちょっと文字を赤くしているのですけれども、どこから手をつけるべきかと。例えば窪田地区から始めるのか、須佐地区から始めるのか。組織について振興協議会から、もう佐田自治協会そのものから着手すべきかとか、家の 1 軒 1 軒を当たって問題を調べるつもりか、とか。

また、調べるはいいのだけれども、アンケート用紙ですか、紙を配ってそれで終わりにするのか、直接人に聞き取り調査をするのか。そもそも論なのですけれども、誰に聞くのかというのは、結構部会で集まってみて話をしても、結構いろいろな意見が出まして。どうも部会としての方向性というのが全然定まらなくて、うーんと頭を抱えることが多かったのです。

その写真がこういうふうに、皆下を向いて、うつむいていますけれども。スライドの画像も考える人。スライドも考えている状況で。今回の司会の貴子さんが、大体いつも司会を務めながら、皆さん生きていますか、大丈夫ですかというふうに、ハッパをかけることが多かったです。

2 年目を迎えて、大分最近結構皆さん活発に議論されるようになって、こういうお通夜状態はなくなってきたのですけれども。1 年目の最初のころは、結構無言というか。何を話せばいいのかも分からないという状況が結構多かったです。

そんな中でも、第 3 回の部会において、全 13 地区の、佐田町全体の現状調査をするのだったら、振興協議会単位で実施してはどうかという提起がありまして。その調査に向けて本格的に活動していこうではないかというのが、2018 年の 11 月から本格的な活動が始まりました。

これがその第 3 回部会のときの皆さんの意見とか、アイデアとかをまとめたボードなのですけれども。本当に、これをまとめようと思うと結構大変なのです。皆言ってくださるのだけれども、では部会全体としてどうしていこうかというのは、これが難しい。そんな中でやっと、振興協議会を対象にアンケート調査をしようというのが、やっと決まりました。

作野先生の講演の中で、振興協議会の組織というのがかなり稀有な存在、今の視点から見てもかなり大胆な組織だということをお話されたのですけれども、実はこのときに、そこまで理解せずに、ただ何となく佐田町の組織を見る中で全地区にある、メーンの地域運営組織だということで、そこまで深く考えずに振興協議会という組織を調査しようということになったのです。ちょっとお恥ずかしいところなのですけれども。

それで、地域の課題を抽出するための糸口として、「佐田町まるごと棚卸計画」というのを立案しました。これが、さっき 2018 年の 11 月から動いたと書いてあって、大分間が空いていると思われる方も多いのですけれども、この計画として、部会としてまとめるまでには結構やはり議論というか、時間がかかりまして。本格的に計画として動いていくというのが、去年の 6 月からなのです。

まず、ステップの1として、振興協議会単位で各地区の課題点や困りごとを調査。ステップ2として、その調査結果をデータ化して、部会だけではなく、部会の外にも提示して、情報を共有しようではないかと。それでステップ3、最終段階として、佐田町全体で連携して、現状の見直しや改善策を図ろうではないかと、こういう計画を打ち立てました。

これが実際に振興協議会の会長様にお配りして、調査を依頼したときの調査シートになります。この前佐田自治協会の理事会で、私が出向いて、調査協力いただいたことに対してお礼を申し上げます。まことにありがとうございました。

調査の内容としては、主に組織面と活動面ですね。大体振興協議会で役職とか人数とか、どのくらいの仕事とかに人数が割り当てられているのかというものの調査。それで、活動として、大体地区によって量とか規模と課が変わってきますので、大体どんな活動をしているのか、どのくらいの頻度でやっているのかというのもお答えしていただきました。最後に地域の課題ですね。振興協議会として、会長さんが今課題に思っていること、困っていることは何ですかというのも、この調査シートでお尋ねしました。

活動の内容については、ここではあまり触れませんが、これが実際、調査結果が返ってきて、部会の皆でこういう結果が出ましたと。ではこれをテーマごとに分類して、まとめてみましょうという作業をしているところです。最初の、このお通夜のときと比べて、随分と皆さん元気そうに、楽しく活動しています。やはり、やることできることが決まって、本格的に動き出すと、やはり違ってくるのです。私も実際そうでした。皆さんかなりはつらつとして、議論や活動をなさってくださいました。

それで、ちょっともう今後の課題になってしまったのですけれども。今の2月の時点で、ステップ2の段階からステップ3の、この調査結果をもとにどういうことができるか、見直しが図れるかというのを進めていこうとしていく段階です。それで、振興協議会以外の組織の調査をするかどうかというのは、ちょっと来月の部会でまた話し合いたいと思いますし、どこまで活用できるかというのを、今後の検討課題になるところなのですけれども。少なくとも、今の佐田町の課題というのを見える化していく、可視化していくことが必要ではないかなと思っています。

もう1つ大事な課題としては、今を見直す機会と改善する具体策を、やはり部会のほうから提示していく必要があるのではないかなと思います。調査して終わりではなくて、あくまで部会として、では我々はこういう活動ができると思いますとか、こういうふうに考えておりますのでどうでしょうかという、提案が必要だと思うのです。

今までの組織とかやり方が、果たして10年後、20年後も通用するでしょうかという点を、やはり町全体で考えていくことが重要だと思いますので、まだ活動を始めて2年弱で、まだまだビジョンも固まっていない状態なのですけれども、今回のフォーラムをきっかけに、ますます活動を発展させていきたいと思っています。報告は以上でございます。

**吉田 福谷さん**、ありがとうございました。今3名の方に発表していただきました。これからちょっとディスカッション形式で、少しの時間ですが、ちょっとやりとりをしたいと思

います。本日発表していただいた3名の方と、あと2名の方に来てもらっているのですけれども、3名の方の発表を聞いて、ちょっとご感想などを、では神田さんからお願いします。

**神田** 聞かせていただきまして、本当にありがとうございます。本当に素晴らしい発表でありまして、皆さんそれぞれ実行されている方の、笑顔が素晴らしいと思いました。本当に、一旦舌が動き出すとといいますか、勢いがつき始めるとこういう具合になっていくのかなというのを、本当に見させていただいたような気がしております。あと、幾つかまたお尋ねしてみたいなというところがありますので、とりあえず感想までに。

**伊藤** 3名の方、大変ありがとうございました。本当に活動のいろいろなお話を、まだまだその一部分だと思うのですけれども、聞かせていただいて。やはり、一部の人だけではなく、若い人とか中学生や小学生、子供たちが入っていたり、女性が入っていたり、いろいろな人の意見を取り入れてやっていかれたということが、すごく素晴らしいな、いいなと思って聞いておりました。ありがとうございました。

**吉田** ではそのまま、もし質問があればお願いします。では、神田さんお願いします。

**神田** ちょっとお尋ねしてみたいのですけれども、伊野地区の多久和さんにお尋ねしたいと思います。学校の統廃合のことがきっかけだということだったようでございますが、具



体的に中心的な組織のこともお話があったと思いますが、今一度、最初に活動されるもとの組織のこと。それともう1つ、財源はいわゆる寄付で、ふるさと会というのをおつくりになったということですが、そういったものが主な財源として、活動されているのでしょうか。それをちょっとお尋ねしてみたいと思います。

多久和 組織は、中心になって進めているのは、伊野地区自治協会という組織です。自治協会という組織は、全部で16の集落、町内会があるのです。その16の町内会を束ねるのが、自治協会なのです。自治協会には、町内会のほかに社協だとか体協だとか、そういった各種団体も含まれています。

財源は、自治協会費を各世帯から月1,700円いただいております。年間に2万と何ほかになりますけれども。ですから、自治協会費収入で年間680万円くらいです。それでやりくりをしないとイケないのです。児童館の運営については、自治協会からの持ち出しが120万円くらい、それから市からの指定管理が220、30万円くらいでしたか。

小学校についていうと、小学校の教育後援会費、中学校の教育後援会費、合わせて100万円くらいです。ですから、教育に費やす費用というのが非常に大きいです。

あと、地域のいろいろな活動については、コミュニティセンターの自主企画事業というのがございます。その自主企画事業費が、恐らくどこのコミセンもあまり変わらないと思うのですが、うちの場合は60万円ほどあります。それを使います。

ふるさと会員のご寄付については、主に今のところ小学校への修学旅行経費の補助。具体的にいうと、市内最大規模校の塩冶小学校基準に合わせて、塩冶小学校と同じレベルになるように、修学旅行の経費も、それから卒業アルバムの経費も補助しています。

**吉田** ありがとうございます。済みません、ちなみに野尻さんにも、既存組織との関係というところを、少し教えていただきたいなと思います。任意組織で立ち上げていったという中で、既存組織、自治会とかそういったところと、どういう関係を築きながら進められたかというところも、教えていただきたいと思いますが、よろしいでしょうか。

**野尻** 最初は、地域ビジョンができるまでは、それこそ密に協力してもらわないと、やはり進められなかったのです。大分自治会さんと協力してやらせていただきました。地域づくりというか、地域ビジョンを立ち上げるまでは、公民館の館長さんや主事さんも、地域ビジョンづくりのメンバーにもいらっしゃったので、交流センターも一緒に協働で動いたということになります。あとは、ビジョンづくりの中には、やはり行政の安来市とか、農業普及員の方とか、JAの方とかも、用途用途で入っていただいたというのがありました。

実際組織が出来ていくと、自治会さんとの関係がなくなったわけではないのですけれども、何か求められたら、今やっていることの説明に行ったりとかはしますし、自治会長協議会という、年に1回ある比田の自治会長さんが集まる場には、今社長が出席しまして、そこで今えーひだカンパニーの活動について話をしていたりはしますけれども。そこまで密に、何か協働でやるということではなくて、用途用途で、福祉的な事業のところが多いのですけれども、そういう部分で都度都度お願いするような形で。

ある程度、ビジョンができて会社ができると、だんだんと地域の中でも認知度が上がってきたので、話が早くなったというのが1つあるかなと思います。

**吉田** ありがとうございます。伊藤さんのほうから質問がありますか。お願いします。

**伊藤** 質問をよろしいでしょうか。私も地域の若い人が集まって、いろいろな意見交換の場を持っている、そういう活動をしている中で、やはり若い人に限らず、住民の皆さんもそうかもしれないのですけれども、なかなか自分たちの意見とか思いとか声が、なかなか届かないなというか、もっと聞いてもらいたいなという思いを聞くようなことが多いです。

先ほどの多久和さんのお話の中で、ちらっと聞かれたのが、ふるさと会員さんで、寄付をされると同時に、その人もまちづくりに対しての意見を言ったり、お話を聞いたりされているということが、ちょっと聞こえたかなと思ったのですけれども。例えばどういう人からどんな意見が出たかとか、住民さんの意見を聞くときにこういうことを心がけていることとか、ちょっと教えてもらえたらいいなと思って、済みません、お願いします。



**多久和** ふるさと会員の皆さんは、伊野地区出身の方もいらっしゃいます。それから、そうではなくて、「伊野頑張っちゃうから、応援するわ、1,000円ぐらいなら出しちゃうわ」といって出してくださる方もいらっしゃいます。

当初は、ふるさと会員の皆さんからいろいろなご提言もいただくようお願いもしていましたけれども、そこら辺もまだまだこれからの課題かなと思います。ちらほらとはメールか何かいただいたりして、こういうことをしたらどう、みたいな話は聞いたりするのですが、ふるさと会員になってくださっている皆さんとのつながりを、どれだけ大きな力にしていくのかというのは、これからかなというふうに思っています。

**吉田** ありがとうございます。では神田さん、どうぞ。

**神田** 私は今自治協会の会員、13人の中の1人なのですけれども。今までの中で、本当に仕掛けづくりというか、いわゆる問題、あるいはビジョンづくりというのを本当にやらなければいけないな、というのを痛切に感じました。また、声がけをするに当たっても、先ほど発表がありましたように、中学生の皆さんの発表なんかを聞いても、本当に素晴らしいなと。やはり、ああいうことをもうちょっと早く、仕掛けづくりもやらなければいけなかったのかな、でも遅くない、今からでもやらなければと思うところでございます。

それでまた、大学の立花さんの発表、それから作野先生のいろいろなお話も聞きますと、やはり本当に地元のことを考えてくださっているなというのが分かりましたので、何とか自治協会でも時々、時々ではなくて、任期が2年とか4年ということで、変わってしまいますので。その引継ぎであったり、あるいは在任期間中は、先ほど中学校の人の発表ではないけれども、ミッションを持って、本当に自治会に帰ってはその会のことを伝えたり、また意見を持って帰って、それをまた拠点づくりで反映させたりということを、もうちょっと本当にスピードを上げてやらなければいけないなど、ちょっと感想を申し上げたい。

**吉田** MVPというふうにありますので、そこを忘れずにいきたいところですね。まだもう少し時間があるので、せっかくなので福谷さんのほうから、何か質問や気になるところなどがあつたりしましたらどうぞ、お願いします。

**福谷** パネラーがパネラーに質問していいのですね。

**吉田** ディスカッションですから。

**福谷** では早速お伺いしようかと。お二方、多久和様と野尻様の報告の中で共通していたことが、子供たち、小学生とか中学生とか、高校生も参加されていたみたいですが。とにかく、子供と一緒にワークショップもやるしイベントもやるし、とにかく子供との交流がかなり濃い事例だったかなという印象でした。

大人と子供と混ざって地域づくり、まちづくりをしていく工夫といえますか、例えば小学校とか関係各所にどういうふうに提案をしていって、協力を仰いでいけばいいのか。ちょっとそこら辺の、これからの佐田の活動としても参考にしたいなと思いますので、ちょっとご経験とか、こうしたらいいよというアイデアがもしございましたら、ご提示いただければなと思います。

**吉田** これは多久和さんも野尻さんも、2人ともそういう動きをされているので、お1人ずつご意見いただけたらと思います。

**多久和** まずやはり、小学校との連携というのが一番かなと思います。先ほども申し上げましたように、小さな学校がゆえに直面している困難もたくさんあるので、それを正直に聞きたいし、私たちがお手伝いできることをしますよというふうな形で、伊野のまちづくりの課題と、学校の教育の課題がうまくマッチングする。その一番いい例が「伊野いち」という産直市に、子供たちが参加しながら、子供たちは子供たちの学びを仕上げていく、といったところがよかったかなと思います。

それからもう1つ、うちが大事にしていること、力を注いでいることの1つは、中学生、高校生の問題なのです。つまり、小学生のときは近いところの小学校だから、しょっちゅう子供と出会うし、小学校の行事に地域の皆さんもたくさん参加します。でも中学生になると、部活その他でなかなか地域の行事に参加してもらえない、というようなところがあって。

でも、年に1回でも2回でもいいから、中学生や高校生たちの出番をつくろうということ、夏祭りのときにはステージパフォーマンスをやらせようとか、文化祭のときにお店を出すとか、そういうふうな形で参加をやらせようようにしているのです。

今、ビジョンをつくっていますが、そのビジョンの中で学生部会が提案しているのが、20歳未満の青年団をつくる。青年団というネーミングは何か古いなと思ったのですけれども。今の提案は、20歳までの若者、子供たちがつくる組織、それを青年団と名づけて、そうすれば地域の行事なんかに参加しやすくなるだろうし、情報も入ってくるし、やがて自分たちで自主的な企画を立てることができるのではないかと、というふうな提案を今しているところです。

**吉田** お願いします。

**野尻** 比田も中学校がないので、やはり小学校のときがすごく大事だなと思っていて。もちろん私たちが、小学生たちに入ってもらおうと、子供たちの率直な意見が聞けたり、やる気がもらえたりというもあるのですけれども、小学校側としてもメリットとしてやはり、今ふるさと教育というのもされていますし。

あと比田地区の場合は、イベントに参加してもらって、そこで子供たちが企画したものを売るとか、作った物を売るみたいなことをしてもらっていて、そこで金銭教育みたいなこととかもして。小学校としてもプラスになるようなことをして、お互いがプラスになるような関係というのを大事にしています。

小学校の6年間で、特に小学校5、6年生は、えーひだカンパニーキッズというのを結成して、カンパニーにはより強くかかわってもらっているのですけれども、そこで地域に対するいい思い出を蓄えてもらって、中学校と高校は外に出たとしても、思い出がずっと残ればいいなという思いがあります。

やはり中学生、高校生とのつながりというのはなかなか難しいのですけれども、えーひだカンパニーのメンバーのお子さんとか、お子さんの友達とか、本当にまだ少ない人数なので

すけれども、それでもたまに帰ってくるときに、頑張っちょっとお手伝いしてよとか声がけや、そういったことにつながりがどんどん広まっていけばいいかなと思っています。

**吉田** そうですね、特に伊野地区は小学生と、大学生がイノベーションというのでとても活躍されているので、その間にうまく次のステップというふうな感じで、つながっていくようなかかわりが持てれば、より伊野地区にいろいろなかかわり方がふえてくるのではないかなというふうに、伊野地区にも参加しながら、僕もちょっと感じていたところです。

やはり中学、高校というのは部活というのがあって、皆そっちに行ってしまうのですけれども、その中でもちょっとだけでもかかわりが続けばいいなと、僕の地区でもすごく思います。ありがとうございます。

どうでしょう、皆さん。大体聞きたいことは聞けたでしょうか。大丈夫ですか。

それでは、もし会場の中で、今回せっかくですのでこういうことを聞いてみたいとか、ちょっとうるさい意見を言ってみたいみたいな方がいらっしゃいましたら、ぜひ挙手していただければと思いますが、いかがでしょうか。どうぞ、ありがとうございます。

**板垣** 佐田町原田に住んでおります、板垣と申します。よろしく申し上げます。私も70歳になります。

私は今から30年くらい前に、地域の活性化とか、あるいは職場の活性化というふうな話がありまして。正しいかどうか分かりませんが、その時によく言われたのは、水ですね、H<sub>2</sub>O。この水というものは、0度までは凍っていて動かない。熱というものを、刺激を与えてやれば動き出す。さらに熱を加えて、100度を超えれば激しく動くということで、地域のほうへも刺激を与えてやれば動くではないかというふうな話がありました。

確かに当時佐田町でも、「コミュニティブロック」というのがありまして、私どもの地域でも蕎麦づくりというふうなことをやりまして、これは確かに定着をして、今では結構活発な活動をやっております。ところがだんだん年をとりまして、今70歳、地域も高齢化とそれから人口の減少、これがすごく進んでおりまして。そういうところにあまり刺激を与えてやると、かえって傷をつくるのではないかな、という思いが少しあります。

作野先生のほうから、地域の公認を得て何かをするというふうな話がありましたが、私は今考えてみますに、地域にとってコミュニティは階層が4段階あるとおっしゃいましたが、原田の場合はもう1個ありまして、旧小学校校区でありますから、5段階あります。そのコミュニティで、やはり大切にしたいのは、生活の質を維持すること、それから悪くしないというふうなことが大切かと思っております。

質といっても多様なものでして、なかなかこれというふうなことはすぐ言えないわけですが、例えばだんだんと人口が減ってくると、草刈りの担当範囲も広がるし、それから農地の荒廃も進んでくるというふうな、環境を維持することも大切な質だし、それから、昔から伝わっている伝統。例えば須佐地区には須佐神社がありまして、そこにある念仏踊、これは500年以上つながっている伝統行事かと思っています。あと、私どもの地区にも神楽があって、これは150年の伝統があります。こういうものはやはり、地域を挙げて維持

すること、これが1つの誇りにもなりますし、やはり地域に住むことにとって、質が維持できるといようなことを思っております。

それから、仮にこういうことをやる前には、例えば拠点になります公民館とか、そういうふうなものの維持も必要です。今日はフォーラムで、テーマからしてあえて言わなかったかもしれませんが、やはり地域を守っていくためには、自治体の役割は大変大きいものだと思います。自治体の役割は、住民の福祉の増進を図ることを基本とし、と書いてありますので、やはり市の中心部でない、周辺部ですね。周辺部の住民の福祉を増進すると。

この場合に、行政のコストは確かに高いし、我々の生活コストも高いということもありますが、そういうふうな地域を守っていくためにも、ぜひとも自治体というか行政に、積極的にかかわっていただきたいと、こういうふうに思っております。

今日はあえて、テーマからして自治体の役割の話はなかったかもしれませんが、今後私どもが地域で活動をしていく上で、守っていく上で、ぜひとも自治体の役割というものをきちっと発揮してもらいたいと考えております。よろしく申し上げます。以上でございます。

**吉田** 激励の言葉というふうに受け取らせていただいてもよろしいでしょうか。ありがとうございます。ちょうどいい時間に終わっていただいております。

最後に作野先生から、全体の総表をいただきたいと思っております。作野先生よろしく申し上げます。

**作野** 皆さん、寒い中お疲れさまでした。壇上はもっと寒い。先ほど総括のようなお言葉がありましたので、私がやるのは蛇足なのですけれども、ちょっとまとめましたので、ごらんいただければというふうに思います。

まず、3つの団体の皆さん、大変すばらしい実践で。特に地元のほうも、これからというところはあると思うのですけれども、本当に小さな拠点部会を立ち上げられて、そして福谷さんのような若い方が部会長でやられるというのは、これ自体が大変すばらしいことだと感じました。

その他色々メモをしておりますが、ちょっと論点を整理しましたので、次をごらんいただければと思います。こちらなのですけれども、上から順番に多久和さん、野尻さんという感じなのですが。本当は下からのほうがいいのですが、上からいきます。

まず、多久和さんの言葉の中で気になったのが、「人口減少や高齢化のスピードに追いつけない」。これは全国でも議論していて、本当にそうだとこのころで。実は、取り組むことは大事だし、それから活動で成長することも大事なのだけれども、その先どうなるのだというのは見えないというところは、多分今後も国とかでも議論になると思います。

それから「地域の運営組織の変革とともに、行政も変革」。これ、重要です。これはもう、出雲市さんという話より、県というか国なのです。

私たち、兵庫の豊岡で行政と一緒にこれをやろうとしたら、わかったのです。それは、市だけ変わろうと思っても、全然歯が立たない。地方組織であったり、県組織があつて、



中国地方の組織があって、国の組織があったりするのです。そうすると、全部垂直的にかかわっているんで、この豊岡市だけやめるといふわけにはいかないのです。このあたりは、本当に国を挙げて変革しないとイケないと思います。

それから比田のほうは、ビジョンをつくらないといけないといふところに、危機感からの発生だったのですけれども、その結果他人ごとから自分ごとになったといふ、もう典型的にすばらしい取り組みをされたといふふうに思います。

そして、検討段階では、ワークショップとかで世代別にやられて、皆が参加しているのですが、今度えーひだカンパニーで実行に移すときには、チームづくりが重要だと。これは翻訳化すればいいといふ話ではなくて、別に任意組織でも、あるいは多久和さんのところのように、自治協会そのものが直営でやると、どこがやられてもいいのですけれども、そのチームづくりが重要といふことを学ばせていただきました。

それから、この佐田地域のことなのですが、小さな拠点部会さんが、まず地域課題の棚卸からスタートしようといふことで、本当にそのとおりだと思います。重要なのはやはり、プロセス重視といふところだと思います。福谷さんが本当に、ものすごく上手に説明されて、お通夜のような会から皆生き生きしてきたと、これはまさにプロセスだと思います。それだけでも十分成長だと思います。

そして、最後のほうにおっしゃった、これから解決していかないとイケないといふことで、地域課題の解決をやる、自治協会さんに提案されたといふことなのですが、ここにある種スタートラインですね。今度は第2のスパイラルで、では実際どうやって変えていくかといふときに、また拠点部会さんでも検討していただくと。

結局いろいろ回り回るけれども、1つ1つ紡いでいくといふか、やっていくしかないのです。その試行錯誤の中で、結果として地域がよくなると。先ほど2つの地区のように、結果だけ見ると何だかスパスパと行っているような感じがしますが、実際はいろいろな苦労があったのだと思います。ですから佐田は、思い立たれたときが吉日で、今まさにそれを進められているといふふうに思います。

これについては、多分なかなかご理解いただけないと、私は思っておりますので。これは私の意見といふことで先ほど申し上げましたが、強いて言えば、今自治協会さんが小さな拠点部会に、ある種全権委任をして、福谷部会長のもとにやっていらっしゃると、まさにこの第一歩が踏み出されたのではないかなといふふうに思います。

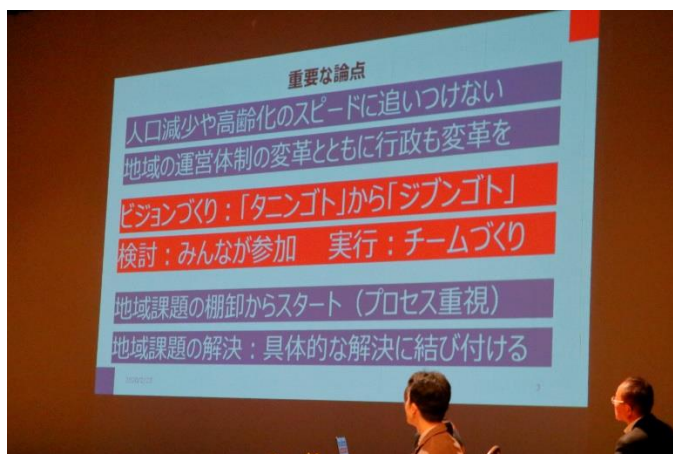
先ほどご発言いただいた方のご意見と、私の意見と、全く相違ないと、私自身は認識しておりますが、会場の皆さん、相違があるとすれば、またお聞かせいただければと思います。

最後のほうに、気になる点なのですけれども、これだけではないのですけれども。どうしたら地域住民が一体となれるのだろうかとか、それからやはり、今日はよかった、帰って自治会で皆に知らせようといふと、また皆からできないオーラみたいなものが出てくるので、こういうものの繰り返しだと思います。

そうした中で、先ほどの中学生の生徒さんたちが発表された、mission, vision, passion です。これ、素晴らしいですね。担当の先生は英語の先生みたいですので、このMVPというのを、佐田のキャッチフレーズにするとよいのですが。

やはり思ったのは、ミッション、使命みたいなものは勉強すれば、佐田の方は優秀なので、多分、皆さんはお持ちです、先ほどご発言があったように。それからビジョンも、ある種つくればできる。最後、このミッションというのが大事なのです。この感覚というか、熱量みたいなものをどうやって醸成するか、ここが重要だと思います。これは雰囲気盛り上げるとか、きょうのような会で「よっしゃ」となる、そういうことが大事だと思った次第でございます。時間が来ましたので、以上で講評とさせていただきます。どうもご清聴ありがとうございます。

**吉田** 作野先生、ありがとうございました。以上でパネルディスカッションは終了させていただきたいと思います。先ほど中学生のお2人に教えていただいたとおり、佐田の皆さんは温かいというふうに聞いていたので、安心して進めることができました。以上で終わりたいと思います。ありがとうございます。



## 閉会の挨拶

**三島 (貴)** パネラーの皆さん、作野先生、吉田さん、本当にありがとうございました。

長時間にわたり開催してきましたフォーラムですが、閉会に当たりまして、このフォーラムの開会に向けご協力いただきました、佐田自治協会会長、山本義隆様からご閉会のご挨拶をいただきたいと思います。会長、どちらにおられますか。

**山本** 失礼いたします。ずっと以前から作野先生には、佐田自治協会は重層階層だということで、いろいろご指南を受けている、佐田自治協会の山本でございます。

佐田自治協会は、今日は協力ということでございまして、主催はNPO法人スサノオの風、並びにさだラボの作野先生、島根大学の主催ということでございまして、大変盛会裏に終わったのではなかろうかと思っております、大変ありがとうございました。



私ども佐田自治協会でございますが、話の中に出ておりましたように、13自治会の、14振興協議会の組織になっていまして、自然発生的にそういうふうなことになっています。

そして、そうしたことで、佐田自治協会のあり方をどうすべきかということで、実は今日のようなフォーラムを初め、平成28年と29年の2年間にわたりまして、各地区の代表の皆さん方にお出かけいただいて、協議をしまして。それから平成30年から、今日の佐田自治協会を結成したということです。

当然、自治協会でございますから、会費のこととか組織のこととか、運営の方針とかありまして、そういったスタイルで現状整理しているところでございまして。

もちろん民主的に、変な言葉ではございませんけれども、各地区から代議員という形で、全員参加ということを旗印に協議して、総会を経て決議しながら、ここに至ってまして。その結果が、たまたま今年度、いわゆる小さな拠点づくりと雇用創出部会をつくるということで、今日に至ってまして。きょうはその人方の代表という格好で、小さな拠点づくりは発表されたという経過でございまして。

先ほど島根大学の作野先生、並びに立花さんから、いろいろ佐田町を診断いただきまして、提案ありがとうございました。また、貴重な事例発表ということで、多久和さんの伊野地区、それから比田のえーひだカンパニーさんの野尻さんにご発表いただきました。大変ありがとうございました。

私どもも元気を出して、きょうの、ちょうどタイトルが、「タニンゴトからジブンゴト」それからもう1つありましたね、「つながる時」、つながるというテーマでございまして。何とかお互いにつながって、よりよい地域をつくっていきたいというふうに思うところでございます。閉会の言葉にはならなかったと思いますが、お礼を申し上げて、挨拶にかえたいと思っております。きょうは大変ご苦労様でした、ありがとうございました。

